

# 夢殿

北原白秋

青空文庫





上卷





## 白良

昭和九年八月中旬、台湾巡歴の帰途、神戸に迎へたる  
妻子と共に紀州白良温泉に遊ぶ。滞在数日。



## 白良

## 白良の浜に遊びて

白良しららの ましららの浜、まことしろきかも。驚くと、我が見ると、  
 まことしろきかも。踏みさくみ、手たぐさととり、あなあはれ、まこ  
 としろきかも。子らと来て、足投げて、膝くみて、ただにしろき  
 かも。白良の ましららの浜、松が根も、渚べも、日おもても、  
 ただにしろきかも。あなあはれ、目に霧きりて、火気ほけだちて、しろ  
 きかもや、しろきかもや、立ちても居ても。

おなじく

ましらの白良の浜はまことしろきかも敷きなべて真砂も玉もま  
ことしろきかも 旋頭歌一首

また

ましらのまこと白浜照る玉のかがよふ玉の踏ふみ処ど知らなく

まことにもしろき浜びや足つけて踏みさくみ熱まやうき真砂照る玉

音絶えてかがよふ砂浜ましろくぞ白良のま玉ほのけ火気澄みつつ

昼渚

松が枝えの疎あらき鱗うろこに照るさへや真砂は暑し吹きあげの玉

女め童わらはの脛すねの柔毛にこげにつく砂のしろき真砂は光りつつあり

浜木綿はまゆふは花のかむりの立ち枯れてそこらただ暑し日ざかりの砂

浜木綿を、また

牟婁むろと言へば葉叢はむらたかぐき高たか茎き百重ももへなす浜木綿の花はうべやこの花

紀の海牟婁の渚に群れ生ふる浜木綿の花過ぎにけるかも

糸しだり花過ぎ方の浜木綿は影おだしけれほ火照でる夕波

崎の湯二趣

崎さきの湯ゆは湯室ゆむろの庇よつまそ四端反り夕風にあるか入江向ひに

牟婁の崎荒き石湯いはゆに女童めろ居りて大わだの西日ただに明あかかり

夜景

浜木綿ゆむろに湯室あかりつの灯映りみて真砂踏み来くる足音絶えぬ

短夜

短夜の白良の浜きよに来寄きよる波燈籠なでとうろうにまくわ苧をがらなどをあはれ

## 白良莊起臥

朝ながめ夕ありきして牟婁の津や白良の浜に玉をめでつつ

玉ひろふ子らと交らひ牟婁の崎白良の浜に七夜寝ななよにける

砂いくつ畳にひろふ起おきふし臥ふしも早やすずしかり唐紙たうしのべしむ

郷土飛翔吟

## 小序

我弱冠、郷関を出て処女詩集「邪宗門」を公にして以来、絶えて故国に帰ること無し。その間、歲月空しく流れて既に二十の星霜を経たり。時に望郷の念禁じ難く、徒に雲に島影を羨むのみ。偶 昭和三年夏七月、大阪朝日新聞社の求むるところにより、その旅客輸送機ドルニエ・メルクールに乗じて北九州太刀洗より大



阪へ飛翔せんとす。これ日本に於ける最初の芸術飛行なり。事前、乃ち妻子を伴ひて郷国に下る。山河草木、旧のごとくにして人また変転、哀樂また新にして恩愛一のごとし。南関柳河行これなり。二十三日、本飛行を決行するに先立つて、幸ひに試乗してその太刀洗より郷土訪問飛行の本懐を達するを得たり。恩地画伯、長子隆太郎と共なり。ここにその長歌十七篇短歌二百五十三首を録す。

序篇

海を越えて

七月十八日朝、関門海峡を渡る。

海を越ゆるただち胸うつ国きもつ胆我が筑紫なり声に荒くも

母おやの国筑紫この土我が踏むと帰るたちまち早わらべや童なり

見るただち顔あふに溢るる親しみは故郷ふるさとにあれや帰り来にけり

我が言へば音の響に添ふごとく響き応こたふる国人君は

明日飛ぶと

雲美はしき山門やまとのまほらここにして我はや飛ばむ高き青雲

南風はえのむた真夏大野を我が飛ぶと明日待ちかねつ心あがりに

産土うぶすなよこの山河をかくばかり直ただにし見ずて我恋ひにけり

## 山門の歌

山門やまとはもうまし耶馬台やまと、いにしへの卑弥乎ひみこが国、水清く、野の広  
 らを、稲豊ゆたに酒を醸かもして、菜は多さはに油しぼりて、幸さちはふや瀉の貢と、  
 珍うづの貝・ま珠・照る鰭はた。見さくるや童わらべが眉まゆに、霞引く女山ごやま・清水。  
 朝光あさかげよ雲居くもゐ立ち立ち、夕光ゆふかげよ潮満うしほち満つ。げにここは耶馬台やまと  
 の国、不知火しらぬひや筑紫瀉、我が郷さとは善しや。

## 反歌

雲騰あがり潮明うしほるき海のきはうまし耶馬台やまとぞ我の母国おやぐに

## 妻と子らに

汽車いよいよ生国筑後に近づく。

筑紫野は大き出水でみづの田つづきを簑笠つけて人遊ぶかに

筑紫は我あを生ましける母の国大き出水でみづの田の広ら見よ

父我はここに響けりまつぶさにこの愛かなしかる山河は見よ

父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青とに染められにけり

「雀の卵」

夏山は赤と青との雉子馬の清水寺も雨こめにけり

夏かすむ女山ぞやまの岩の神籠石かうごいし老ふけ鶯も谷にくだるか

午近く、大牟田に着けば、既に師友、肉親の人々、柳河或は南関より来りて、我等を待ちたまふに会ふ。

我が帰る心矢のごとありけらし早や着きたりと笑ひて泣かゆ

## 南関・外目篇

肥後玉名郡 なんくわん 南関、そのかみの関 せきまち 町、その字 ほかめ 外目は我が母の生地にして、我にも亦、第二の故郷たり。乃ち、大牟田より先づ出迎の叔父たちと共に上内の山を越えてその土を踏む。親戚知音の人々の喜びかぎりなし。一夜、町の招宴に臨み、竜田川の橋ぎはなる島田家に泊る。翌十九日、外目近郊の外祖父母の墓に詣で、後、石井本邸に帰る。山河旧のごとくなれども、



その母の生家は既に昔の倅なし。

索麩の関町

掛け竝<sup>な</sup>めて玉名少女が扱<sup>こ</sup>きのばす翁索<sup>さうめん</sup>麩は長きしら糸

し  
手うち索麩戸ごと掛け竝<sup>な</sup>め日ざかりや関のおもてはしづけかりに

山<sup>やま</sup>間<sup>あひ</sup>は貧しき関のありやうを暑き日ざしにて敢て見て過ぐ

## 恩賜の時計

南関田町の島田家は我が母の異母姉の家なり。従兄敏三は帝大法科に学びて聞えし俊才なりき。いま一家すべて死に絶ゆ。

しろがねの恩賜の時計、かしこ畏むやその子秘めにき。秒隔おかず死ぬまで愛めでぬ。子が死にて愛かなしき時計、形見よと、父は後愛あとめで、命よ

と、いとほしと、日も夜も持ちき。時刻むその秒の、その秒すらも絶えざりき。その小さき恩賜の時計、父死にて母に伝へき。その母も、ちちちちと、その音聴きき。子の敏びんぎょう三あはれよと、命よと、また継ぎ巻きぬ。生けるあひだ、その臨終いまはまで、その螺子ねぢ巻きき。人の世の真実の、この音の、つきつめにけり。

## 反歌

時計の秒針はりは進むと子が死にて父へ母へとつたふる絶えぬ

老柿

島田家その後、従妹類子（北原氏）夫妻之を継ぎたれども遠くロスアンゼルスに在り。一の叔父隆承老その跡を守る。老は生来徳望高く、今また南関町長たり。

中庭の柿の老木は庇より手のとどかむに暑き日照ひでりや

乏しきを老いて豊けき大人見れば鶏割とりさけ風呂焚みけ造酒よと麩めんよと

割く鷄とりの胆青きもきまで下照したてらす柿の葉ごみに風とどまりぬ

低屋根に鉄砲風呂の煙立ちあくまでも暑き西日たもてり

外目、祖父母の墓に詣でて

お墓山煙草の花にふる雨のほの紅あかうして身はうつつなり

この道よ椎の落葉にふる雨のいたくもふらねよくしめりつつ

外目、石井本家

母の生家石井家は南関の西、外目の丘にあり、いま二の叔父貴道氏、その兄に代りて本邸にあり、而も世の転変は甚だしく、旧時の高閣既にその半ば取りこぼたれ、庭前庭後、ただ荒るるにまかせたり。

百日紅さるすべりおいき老木おいきしらけて 厠戸かはやどの前なる石もあとなくなりぬ

白きかへ鶏かけあさりさわめく影のみぞただに照りかへ反る動きにてあり

老樹なほ存す

背戸柿やこれの爺をぢさが木洩れ日に身うちゆるがし我ら遊びし

蚕室の跡にて

玉名のや少女をとめ索緒くちたて煮る繭のころろ小をどる玉白かりき

そのあたりの家々をまた見てまはるに

粗あらかべ壁に影して低き草庇いまも山家は貧しかるなり

零余子

裏なる三の叔父武雄氏を訪ふ。

七面鳥乳にふし嘴かき垂り尾羽張りてとめぐる庭の日ざかり今は

病み臥こやす人が眼うつす外の庭に零余子むかごそよぎてげに外目ほかめなり

遠近を眺めて



高き屋に常眺めてし前の山いまも恋しき一つ松見ゆ

上内は谷をへだつる前の山肥後と筑後の境松あはれ

## §

母の里外目の夏は月夜には笛おもしろく子ら吹き立てぬ

横笛は子らが手づくり南瓜の花かかるあたり月夜吹きつつ

§

幼なくて裸馬らばをせめたる山坂に磨墨川といふが響きし

§

赤ん谷山桃実る梢うれ越えて鷺巢山わしのすやまは雲近かりき

夏山は霞わけつつ持て来たる山桃ゆるゑにそのよき姥うばを

母)

(母の乳

柳河・沖端篇

青櫨

葉がくりにいまだか青き櫨はじの實の幼なごころよ我はゆめみし

とりではじ墨なす櫨こむらの木群の深みどり我が水みなかみ上はみ霧霽れつつ

やまと山門は丘も水際みぎはも櫨はじ群むらのたわわのみどりしたたりにけり

瀬高にて

十九日、外目を出でて筑後の瀬高へかかる。上庄の江崎氏を訪ふに

酒屋には酒屋よけむと嫁に来しお加代姉さもただの古ふるづま婦

空飛ぶを弟おとがあやつる翼かと早やおぼすらし声おろおろに

御許おもとには童女わらわめ童数群れて亦若かりしけぶりだになし

## 童女柳河

午後、いよいよ郷里に入る。柳河女学校にて

額ぬかがみ髪かみの笑えまふ女めわらは童わらわこのごとくあどなきものを恋ふとありにし

我老いぬただに愛かなしき額ぬかがみ髪かみの面かほあげてあるその子ら見れば

夏ごろも匂ふ少女は朝ひらくからたちの花と清すずしかるべし

## 中学伝習館にて

我、中学伝習館を学業卒へずして去りぬ。寧ろ追はれ  
たるにちかし。而も我が今日ある、恨無くしてただ感  
謝あるのみ。

儼<sup>やら</sup>はれし我の来<sup>こ</sup>し方<sup>こ</sup>こにして早や遙かなり帰り今在り

これの子ら<sup>なげき</sup>歎知らざり我が言ふをただおもしろと笑ひ爆<sup>は</sup>ぜたる

我が声にひびき応こたふる子らありて顔ごとごとく笑ひくづれつ

## 沿道

沖端に近づくに、城しろうち内、矢留やどみ両小学校の生徒、既に  
旧藩侯邸の前に整列して我が一行を迎ふるあり。雨中  
三時間の余も佇立したりきと。

雨に佇<sup>た</sup>ち竝びるやまふ子ら見れば我幼なくてかくも迎へし

林泉の鴨

旧藩侯邸の林泉は古来の名苑にして、所在の鴨おのづからに集り嬉遊するもの数を知らず。

石多き林泉<sup>しま</sup>のたをりにつく鴨の寄り寄りにさびしおのがじしをる



この林泉しまに潜かづく野鴨の夏鴨の数は光れど広もき水の面

か広びろくて却かへてしづけさまさりけるこのよき林泉しまに鴨おほくゐる

昼しの林泉石まいはのあひさにゐる鴨の一羽は黝くろしつれづれの鴨

泉石せんせきのここだあかるき真日照まひでりに青鷺が佇たてりう泛うく鴨のあひだ

日のうちも幽ゆけくあらし引く水のかがよふ方へ鴨の寄り行く

日は暑しし林泉しまの撓たをりにつく鴨のゆきあひの鴨のくわうと啼きたる

林泉しまの鴨おほに遊べばゆふつ方荒き野鴨も下りおて来にける

林泉しまや夏空の広らを飛び来きたる荒き野鴨のふりもおもしろ

林泉しまや夏この夜浅きに水にゐて月の光を潜かづくものあり (その後  
に夜一首)

矢留小学

遂に我が唯一の母校矢留小学校に臨む。乃ち我、故老、

旧知、児童を前にして嗚咽、しばし言葉絶ゆ。

息つめて子らまじろがず空飛ぶに何悲しきと思ふなるらし

我が言ひて絶ゆる言葉は子らはいぎ老いたるどちや知りておはさ  
む

雲仙の山を眺むる朝霞ここに学びて童わらべなりにし

村社、太神宮に詣でて

宮裏はそこらの砂の日に蒸れて土糞どふんのにほひいまにをさなき

裸足はだしには小砂ざらつく絵馬殿に幼なかりける子ら遊びにき

神にうつ大きい太鼓はその朝やとうとうとあげてゆくらつづけぬ

宮司は旧師木下登三郎先生なり。ぼそぼそと老いたまへり。

この神酒みきは中ほど黒き土器かはらけにとよと注がれていや沁みにけり

展墓

専念寺くろ薨しづみて閑かなり我が寺と思ふはひりの照りを

閻魔堂草むす軒のうらべよりつぶやききこゆ蜂か巢ごもる

夏た闌たくる寺のお堀のとちかがみ源五郎虫もくろ黝くろみつつあり

夕風はいきるる草を墓所はかどには人多さはに來居きをり我が泣かむ見に

明治三十四年、十三にてみまかりし妹ちか子の墓は、  
まだ土を盛りしままなり。

土に沁む線香の火のまだ見えて散るいくつあり青き折れ屑

沖端

柳河の西南半里、我はこの沖端に生れぬ。漸くにして  
 その石場に帰るに、すでに夕に近し。町には祭の楼門  
 チョウギリといふものを我が為に立て、人々、また宴  
 を張りて泣く。

街堀まちぼりは柳しだるるもろぎし両岸くみづを汲水場の水照みでりおだ穩に焼けつつ

かいつぶり橋くぐり来ぬこ街堀まちぼりは夕ゆふなぎ風水照みでりけだしはげしき

我が見るは入日まともにさしあたる駐在所脇の二挺堰にちやうゐびの渦

町まちほこら祠 石の恵美須しゆの鯛の朱しゆの早や褪せはてて夏西日なり

その日に

もの言ひて前かがみなる甚吉は柳の洩れ日まぶしむならむ

菟藟屋おとの弟おとの末吉泣きめだち女子めのこさびしか今は媪をばめく

葉柳や今の日ざしに相見れば誰彼の頭づも薄くなりつる



## 生家

我が生家は今、人手にわたりて、とどろしき鐘詰工場  
となりぬ。初めて妻子を伴ひて、この我家にあらぬ家  
の門をくぐるに、胸塞がりてまた言ふこと無し。

泣かゆるに日は照り暑し湯気立ててあげまき蟬を今釜かまに煮沸す

照る砂に雷管のごと花落す朱欒ザボンひとき一木が老いてお庭に

棟むながはら瓦 千石船の朱しゆと碧あをは正目まさめ仰ぎて深きあらくさ雑草

鍋二つ汲水場くみづに伏せて明らけき夏真昼なり我家わがやなりにし

白しら栄はえに蛇くちなは奔る裏堀は水紋すゐもんの動きかげ光とありつつ

我が書齋たりし隠居家は、なほ遺れども、既に久しく  
鎖しぬ。

空しかり縁に眼をやる泉石せんせきも常水つねたたへ濡れてありしを

我家は菅家くわんけの裔すゑと宣のらしたる大伯母おほをばましき敢て読みにけり

我が幼な遊びの穀倉いまなほ存す。外壁破れ、ひとへ  
にあはれ深し。

穀倉は外板壁のか黝ぐろきが日中ひなかの堀に影映すのみ

十数棟にもあまりし酒倉の跡はと見れば

五月雨に麦は落穂も取り入れらずて染色しみいろくろ黝し土に還かへらむ

青光るめくわじやの貝に眼は大き鴉降りゐてまた早ひでりなり

三日みかみよ三夜よさ炎あげつつ焼けたりし酒倉の跡は言ひて見て居り

沖端の鹹川

葦むらや開閉橋かいへいけうに落つる日の夕風にして行々子鳴く

潮の瀬の落差らくさはげしき干潟には櫓も梶も絶えて船の西日に

洋越わたゆと六騎ともが伴は舟な並めて勢きはひ榜こぎ連れ矢声あげにし  
組)

(鮫鯨)

夕風の干潟に黒き粒だちは片手の小蟹く貝ひろひ食ふ

註、ここの蟹すべて片手なり。

西日して潮満つるまの夕干潟宮み長く蟹ぞつぶやく

夕風の干潟まぶしみ生なまがひ貝みろくや弥勒みろくむく子の額ぬかがみ髪みにして

西日には蟬あげまきむきて居るならし後姿うしろけ気ぶかき四五の女童めわらは

女童めわらはや我は思へば額ぬかがみ髪みのかぐろき瞳こなた此方見あげつ

潮くさき突堤うろこに沁むる夏西日音あわて落つるむつごろ影あり

註、沖端にては突堤をうろこと云ふ。石にて鱗のごとく畳める故なるべし。尚「むつごろ」は小さき山椒魚に似たる魚にて、よく潟を走り、突堤の石垣にも登る、前世紀の遺物の由。日本にていま棲息するはこの土地のみ。

魚市場落日いりひあかき  
に手品師は鍰いりひまでもり  
ゆうと刀たうを吞みつも

## 乳母

字、筑紫村のほとりに、妹の乳母を訪れて、同じくそ  
 の日、

風かよふ蘆のまろ屋に息ほそり白鷺のごとこ臥うやる姥ばはや

老の息かくて絶えなむ女めわらは童ほとの陰ほとどころさへも知りきと泣くを

朝の揮毫



柳河町の旧友川野三郎氏宅に泊る。盛んなりしこの柳  
河にての歓迎の一夜も明けて、

墨を磨り若かへるでは朝あさ光かけのすずしきがほどをゆとりもたなむ

夏の三柱宮

高畠公園の三柱神社は藩祖を祀る。二十日、ここに詣  
 でてまた幼き日を偲ぶ。

太鼓橋欄干橋らんかんばしをわたるとき幼子をさなご我は足あげ勢きはひし

三柱宮水照みはしらぐうみでりしじ繁なる石段いしきだに瑪瑙の小蟹ささと音あり

神楽殿砂吹きあぐる白南風しらほえに小蟹ちり走る鋏立てたり

宮地嶽神社は、その裏参道にあり。

鹹しほ涸ひがはる川堰ぜきの下の葦むらに行々子鳴きて鳩はお堀に

水路舟行

二十日、再び沖端に帰りて、人々と共に楽しむと柳河  
まで小舟に棹さしのぼる。恩地画伯も同舟なり。

我つひに還り来にけりくらし倉下したや揺るる水照みでりの影はありつつ

註、倉下とは倉の庇の内らの壁。

夏真昼わが故郷ふるさとは外とに干して巻線香のほひかなしも

しづかさは殿とののお倉のの昼ひる鼠ねずみちよろりとのぼりまたも消けぬかに

註、昼鼠とは土俗に水陽炎の影をいふ。

御船倉水照みでりゆたかに舟うけて吹き通る風の夏はずしさ

御船倉いとど明るき水の上は蛙のこゑもよく徹るなり

水のべは柳しだるる橋いくつ舟くぐらせて涼しもよ子ら

土橋をわが往きかへる柳かげ青銭あをせに一つ投げてわたりし

南風はえすずし籠飼ろうげあげをる舟ふなわきをわが舟にして声はかけつつ

風のさき黄なるカンナの群落ぐんらくに舟棹さしかへす今はまぶしみ

橋ぎはの醤油竝倉西日さし水路すゐろは埋む台湾藻の花

背戸ごとに小舟もや纜へる汲水場にはをりをり女居りて日暑し

夏なつぼり堀と狭せばむ水曲みわたの葦むらはたださわさわし小舟さ棹しつつ

二十年前

処女詩集「邪宗門」の上梓の直後なりけむ。かかるわ  
かき日の帰省の夢を境として、その後二十年絶えて帰  
省することなし。之等の感懐も今は昔となりぬ。

## 合歡

葉のとちてほのくれなるの合歡ねむの花にほへる見れば幼な夕合歡

水のべにいまだをさなき合歡の花ほのかに紅あかく君も眠ねななむ

## 鳩の浮巢

水の街棹まちさし来れば夕雲や鳩の浮巢のささ啼きのこゑ

旗雲と匂だちたる月の出はたぐふすべなしあかき旗雲

幼な遊び

過ぎし日の幼な遊びの土の鳩吹き鳴らさな月のあかりに

爆竹の花火はぜちる柳かげ水のながれは行きてかへらず

汗あゆる夏のゆふべはすがすがし葦の葉吹きてあるべかりけり



## 菱売のこゑ

都べへ立たむ日近し菱売の向脛むかはぎ黒く秋づきにけり

## 童子柳河 追憶篇

## 馬

馬描<sup>か</sup>かば前脚曲げて、蹄上げ、内腹蹴れと、尾の張りに力こめよ、  
 跳ぶごとく描けよと見せぬ。土けぶり後<sup>あと</sup>にあがらむ、勢<sup>いきほひ</sup>や和子も  
 かくあれ、早や描けと筆持たしめき。末<sup>すゑぢぢ</sup>爺、三代に仕へて老ゆ  
 る大き爺<sup>ぢぢ</sup>よく馬描きぬ。よく見よと雲に馬描く和子や我や、三つ  
 児のたましひ、かくぞ生きぬく。

## 反歌

馬描かば内にためたる蹴上げよと老いたる泣きぬ幼児に言ひて

描く馬よ青雲のぞむ勢いきほひの上なかりしが墨はかすれき

## 石合戦

石うてやよしや若殿、何負けむ、石場の子ら、小舟にて早や漕ぎ  
出だせ、石積めよ、水棹みさをとれ、土橋どばしくぐれ、鳩鳥の火の点つく頭あたま、

いま夕日、それとかかれと、我が仰ぐ館やかたの築地ついでち、濠めぐるここを  
 よろしと、采配やささとかかれと、前うちの金の鍬形、紙鎧、桜  
 緘の大将我は。

### 反歌

十二万石殿とのの若子わくごはさもあらばあれここに六騎ろつきの町の子我は

註、石場は字石場町、六騎とは平家の六騎、ここに落  
 ちのびて漁る。故にこの町の漁師を時俗六騎と呼ぶ。

## 外ながめ

風の日<sup>は</sup>風をながめて、雪の日<sup>は</sup>雪をながめて、  
 玻璃戸越し、大  
 き店さき、朝<sup>あした</sup>には餅焼<sup>もちひ</sup>かせて、  
 日暮にはお膳竝べて、さて師走、  
 我が家の市、馬ぞ、鮪<sup>しび</sup>ぞ、鰯ぞ、  
 牛ぞと、おもしろと、見るとな  
 がむと、子供らの一の和子<sup>わこ</sup>我は。

## 反歌

外そとかはや 厠戸ごごとあけたる町すぢに冬は西日の寒けかりにし

## 初売

あらたまの年のはつ売、暁を大戸あけさせ、早や待つにこそ挙り入り  
 来る。たうたうと人ら入り来る。やまきた※の濃染手拭、酒の名の「潮」うしほ  
 の盃、引出よと祝ふとわけて、我が老舗酒しにせはよろしと、新の榊酒あら  
 に磨みがくと、春や春、造酒みきよ造酒みきよと、酒はかり、朱塗の樽だぶすの栓ぬ  
 き、神もきかせとたが箍たたき、たたきめぐれば、ほのぼの明けぬ。

## 反歌

春の夜と滴りあまる豊造酒は朱塗の樽に添ひて流れつ

習字

太竹の青き筒、つやつやし筒に、たぶたぶと素水入れ、硯の水清  
 けし、墨磨れと、傍注ぎ、注ぎてまはりぬ。勢ひける何なるなら  
 し。幼などちそのかの子らの、筒袖の、その中にしも級長われは。

反歌

女童めわらははほのかなりしか小硯せきの赤間が石せきに墨片よ避けて

雲畦先生

幽人雲畦先生は我が書の師なりき。

よく坐ましきあてに墨磨りから唐からやうの画ゑをたしなみと書しよを楽しみと

田のそなた堀に柳のしだれたる離家はなれの窓まどに老おいていましき

藩札



藩札は赭あかき紙かみぎれ、皺しわに寂さびび黴かびくさき札さつ、うち廃すたり忘わすられし屑くず、  
 うち束ね山と積めども、用も無し邪魔ふさげぞと、放はなられてあは  
 れや朽ちぬ。竹鉄砲紙の弾丸たまよし、花火筒につめよ押しこめ、煙  
 硝しょうよ染しめとはじけと、ぱんぱんと響ひびけ、火花よ飛びちれと、幼な  
 児我は。

### 反歌

しゆうしゆうと花火ふき出でる竹の筒をさな幼ならすでに勢きはひそめにし

## 青錢

青あを錢ぜには穴あき錢ぜによ、字のおもて寛永通宝、裏に波文久永宝、よ  
 く数へよく刺し貫ぬくと、手もすまにそろへて締むと、幼な児や息  
 づかし我、青あを太ふと藺ゐ絢なひし小繩なの、撚よりつよきその緒くくりて、  
 夜々をなげきし。

## 反歌

青錢の穴あき錢をかなしよと父のみ前に貫ぬきて数へつ

## 魚市

魚市は師走の市、歳のすゑ、大つごもり前の三日、みつか雪よ霰ふる中を、塩鯯や、我が家の市、競り市や、魚市場、いくさ戦や、船に馬に大八車、いはちわさりこ、えいやえいや、かららよ、えいやえいや、人だかりわらわら、はいよ、天秤、おうち担棒、走る走る、えや肩搔きわけて。

諸国船歳しよこくぶねとしの塩鯯競りあぐと寒かんもものは裸でおらぶ

## 千石船

師走業我が家の市は大歳と千石船の群れて泊てにし

南風にして千石船の箱ぐるま金比羅までも我は曳かせつ

篋

篋へらや篋、漆搔く篋、篋はよし、色搔き交ぜ、たらりとよ、垂りし  
 たたらす。ぬめりや漆のねばり、たらりとよ一つ反しかへ、つるりと  
 よ二つ反しかへ、日に透かし、時をや見る。乾きや潤うるひや、にほひと  
 や持ち味。漆は、漆はや、あやかし、こは子らよ生いきもの物、かく言

ひて一つ反し、二つ反し、たらしとよ、つるりとよ、爺は見てる  
つ、春の日永を。

反歌

滴りいとど仏師がい搔く赤漆篋うちかへし春もいぬめり

白鷺 童ぶり

夕焼には、夕焼にはの、白鷺が紅つける。白鷺が潟のそこりに足  
なづむ。簗毛風にそよいで。ハレヤ、霞の雲仙、島原は追風の一

と潮、風さきの向う突堤うろこは三瀧みづまぼの、のうもし。

反歌

春もややや濁みわたの水曲みわたを行きありく白鷺の眼の黒くするどさ

童子柳河

涼しきは水豊かなる柳かげ葦笛吹きて我等行けりし

夏の照り葦辺行く子は魚籠びくもちて何か真顔まがほの我にかも似る

今ぞ見む郷国は童がどの顔も我によく似る太郎によく似る（妻に）

## 町内

菟藟屋桶に諸磨り、飴形屋掛けて飴練る、蚊ばしらや春より立たむ。藍俵夏よ染み出む。綿うたす媪はさもあれ、提灯屋老の猫脊が、さてゑがく牡丹に唐獅子、太神宮祭近しと、子供組勢ふよろしと、えやうやと受け合ふものから、向ひ屋の浄瑠璃の師匠、越太夫を我は。

## 反歌

照る日には傘<sup>かさ</sup>を干し竝<sup>な</sup>め雨ふれば提灯<sup>あか</sup>に紅<sup>あか</sup>き牡丹<sup>か</sup>描<sup>か</sup>きける

## 柳河風俗

菱採りはか揺りかく揺り桶舟に両手<sup>もろて</sup>搔<sup>か</sup>きしてその菱堀を

菱壳は久留米<sup>すね</sup>緋の筒袖に手も脛<sup>すね</sup>も黒く菱やとふれ<sup>く</sup>来る



## 飛翔篇

## 太刀洗飛行場

昭和三年七月二十二日、午後一時十分、愈 一期の郷土訪問飛行を執行せむとす。恩地孝四郎画伯同乗、幼児隆太郎をも伴ふ。乃ち太刀洗飛行場に参集す。

驟雨の後日あとの照り来るきた草野原におびただしく笑ふ光を感じず

草原にまだ滴しづくする格納庫日は直射たださして白雨しらさめ過ぎぬ

蟻のごと兵列小さく曲り来て格納庫角かくの銀ぎんくわい灰の照り

照りを来し頭かしらみぎ右して過ぎにけり二列縦隊の地上作業の兵

空は夏光沢つやあるはたてうるほひて格納庫の上の白き断きれぐも雲

新野飛行士この人あり

飛行帽まぶかに笑ふ逞ましきこの赭顔しやがん見れば期するあるなり

単葉ドルニエ・メルクール機両翼張り大き安らあり尾を地に据ゑぬ

平らけき今日の地平のあさみどり軽気球あがる空気がありぬ

音に澄みまはるプロペラ風速はやし我が天翔る時ちかづきぬ

その後にて、妻のいふを聴くに

滑走し去りてふはりと上<sup>あが</sup>る単葉機の流るるがごとき脊筋<sup>せすぢ</sup>なりしと  
雲ぎはに機体消えてより胸せまる虫のすだきを原に聴きぬと

離陸、柳河へ柳河へ

飛ぶただち空<sup>くう</sup>と大地<sup>だいち</sup>の入りかはるこの驚きに我<sup>われ</sup>くつがへる  
滑走しとどろ<sup>こた</sup>応へしいつ知らず身は離陸して軽きに似たり

上昇し早や翼はねかろしあをあをと退しぞき流るる筑紫国原

単葉のドルニエ・メルクール軽快なり今影落す遥か下の原に

雲の先遥さきかにし見む我が軽き合金属の銀ぎんくわい灰よくの翼

上あげ梶かぢを護謨の滑車に照りつむる陽ははげしくて下空虚むなし

海胆ひとでなす草山脊筋朱砂せすぢすさなるが眼まな下したに暑し匍匐ほふくしたりぬ

久留米師団合歓ねむほの明し影つけて二列行進の兵隊が見ゆ

## いよいよ柳河見ゆ

水多さはに柳しだるる四つ手網今ぞ盛夏の柳河が見ゆ

我が飛翔かけりこぞ挙り出でで見む郷人くにびとに心は昂あがれ虚むなしかりけり

## 故郷の

故郷ふるさとの水のごごと、柳河や橋のごごと、たまゆらと、空ゆ  
 一期いちごと、我が見ると、飛ぶと翔かけると、我が和子わこ連れぬ。

## 反歌

柳河は城を三<sup>み</sup>めぐり七<sup>なな</sup>めぐり水めぐらしぬ咲く  
花<sup>はな</sup>蓮<sup>はちす</sup>

## 柳河上空旋回

草家古り堀はしづけき日の照りに  
台<sup>ウオータ</sup>湾<sup>アヒヤシンス</sup>藻<sup>ス</sup>の群落が見ゆ

柳河、柳河、空ゆうち見れば走り出<sup>づ</sup>る子らが騒ぎの手にとるごと  
し

大<sup>おほ</sup>殿<sup>との</sup>の濠<sup>ほり</sup>は広らと水<sup>み</sup>照<sup>で</sup>りして内なる池の鴨むらも見ゆ

殿の池ここだおどろく鴨むらの飛ぶまあらせずその上過ぎぬ

うち低み榎<sup>ぐろ</sup>か黒<sup>くろ</sup>き布<sup>ぬ</sup>橋<sup>のぼし</sup>の日ざかりの靄我は飛び過ぐ

遂に恩讐を超えぬ

伝習館ここぞと思ふ空にして大旋回一つあとは見ずけり



## 沖端上空旋回

空よりぞ我が沖端を見る時し機体ことごとくが光る眼なりき

鯉のぼりけふは視界に吹きながし沖端あり飛びて行くなり

## §

矢留校やどみ身みもて地ちに書く子ら見ればびやくくわう白びやくくわう光ひやくくわうつよしヤの字一つ書く

矢留校に呼ぶ

子らよ見よ、我われかく翔かける、かの童わらべ、かく今翔る。空はよ、皆飛ぶ  
 べし、山河よ越えむに、時なし、またたく間ぞ、鳴なりかぶら矢留やどみの  
 子ら、いざや勢きはひ、土たたら踏み飛べや。

## §

嵐なす羽風我が切りとよもすとの的やどみの矢留やどみの空飛び抜けぬ

泣かむかに我は突き入る低てい空くうを子らぞ騒ていげるその仰うぎ見に

命なり散華の五色ごしき早や撒きて地に著かぬまを突入す我は

六歳むつの子が強く口緊しめこらふるに父なる我われが何ぞわななく

## §

風立てて我が家やの空を過ぎにけるこのたまゆらよ機は揺れ揺れぬ

大揺れに我が家やの蕙すれすれと飛び過ぎにける今ぞその空

我が 挨メッセージ 拶 夏は青田のただ中と子らを目かけて落下傘落す

雲仙と有明の海ひと目見したちまちわめ喚き機は旋回す

右に見し今は左翼にある海の浩蕩として筑紫瀉ここは

いや騰あがり国原恋ふるその父をこの子は空に神を見むとす

父よ、児は遂に飛びぬ

父の顔ありありと見る雲間にて涙すぢ条なす我われ堪へむとす

## 大牟田上空

煙吐く煙突林りんの大傾斜おほなだり我が驚くと見やる間も無し

## 三池山中

この日、南関を見失ひ、あらぬ山中を旋回す。

夏照りの山の小峽をかひにひそかなる部落あり我は空ゆ見むとす

童わらべひとり空を仰ぐは山中に路あるならし歩みゐるなり

## 南関上空

二十三日、本飛行に先立ち、南関の上空を求む。

母の里外<sup>ほかめ</sup>目の空は雨雲の間<sup>あひ</sup>青く潤<sup>うる</sup>ひ母の眼かとも

山方は野町原町北の関その関越えて官軍は来<sup>こ</sup>し

註、野町、原町もともに村の名。南関は西南戦争の時官

軍の本陣なりし由。

棚畑の煙草の花の夏霞祖父おほぢちのみ墓今ぞ飛び越ゆ

石の井に釣瓶は置きて影ありしきのふの庭の空通り過ぐ  
 叔父の家）  
 （二の

老人おいびとのその眼に小さき愛はしたか鷹と見え来む我か山は飛び越ゆ

町の長をさその老おいゆゑに山峡の小峡をかひの関に空翔けくたる

柿諸葉もろはてらてらい照り黒瓦今ぞ見え来つその家やとし見つ  
 家二首)  
 (島田)

その家の低空にして昨きのこ浴びし風呂の煙の早や立ちそめぬ

老柿と築つぎいしあぜ石畦に日の照りて草屋がいくつ関のせせらぎ

幼くて裸馬をせめたる山河を桑の葉はでり照に空かけめぐる

瀬高の上空をも、またあらためて



上庄棟<sup>かみむね</sup>もま黒に群がるはそのかの子らしよく生<sup>う</sup>ましけり

### 本飛行

二十三日、はじめて本飛行に就く。南関の上空よりそのま<sup>ま</sup>ま一路ただ大阪へ大阪へと飛ぶ。

天<sup>てん</sup>の路ひとすぢ<sup>とほ</sup>徹り遥かなり今飛ぶべきはこの航路のみ

眼まな下したの深田ふけだに映る日の在処ありどかがやきしるし月のごと見ゆ

昼がすみ水曲みわたの明りほのぼのと合歡かふかの花は咲き匂ふらし

天つ辺は飛びつつ泣かゆまなしたに虹の輪た円く顕たち明るめり

目にとめて下したなる虹の中飛ぶは単葉機我の蜻蛉あきつなす影

北かたの方雲かたにか黝ぐろき山の秀ほは英彦えいげんならむ尖り出づる見ゆ

我が飛ぶや山はさやらたずた暈なはり暈なはる蒼き梢のみ見る

山なるは森厳にして雲湧こけりず梢をかぐるき杉の群む立らち

空行けば目も恋こしかも山ふかく人居して衣干す見ゆ

物もの駭おどろろきき 悲こしかるらし山の岬嶮峻たにして鹿走り出でぬ

プロペラは音ひびかへれいつ知らず密みつ雲うんの中に入りて暫しばあり

新野飛行士生地の上を過ぐ、二首

密雲のま中衝きゆく我が下に嘉穂こほりの郡はありと言ふかや

山中は音響かへば雨雲の上行く脊をか妹見けむかも

夏山は思はぬ岩に飛沫しぶきしてたぎつ川瀬の水わかれ見ゆ

我が飛翔かけりしきりにかなし女子をみなごの小峽みあみの水浴夏は見にけり

飛びつつぎやうを行失ひし夕影はまさに女をみなの脛はぎを見けむか

深山みやまぎ木の黒檜くろひの木群こむらほ秀ほに濡れて降りしばかりの雲き断きるるなり

深山辺よあはれは久し人入りておのづからなる道通ふ見ゆ

四方の雲ひたに閑しづけくなりしづにけり山峡ふかく瀬のたぎち見ゆ

真夏空絶えず涌くき来くるいつくしき白木綿しらゆふぐも雲の中わくるなり

ここの空真夏た闊たけつつしづかなり行きあひの白き雲の部厚たさ

じんじんと山上百メートルを飛びつつあり緑に徹る命あるのみ

裸童居る山の中なる風景の何ぞ空なる我に笑み来る

雑草あらくさの高原斜面なだり緑なす気流に乗ると一氣に我は

ひた恋ふる地上のみどり逆ぎやくにして流動し去る総すべてなるなり

国東くにとうきは積乱雲のいや騰あがる夏空青し灘に映ろふ

ひた飛びに周防へ向ふ灘の空何か後追あとふ音ある聴かゆ

簑嶋は玉にかつづるひと簑の雨うつくしく光るその嶋

航空はしづけきものと人言ふを夕海の空をわたりうべなふ

翼よくのうら滑車に映る影見れば微動しつ々あらし飛行はつづく

飛ぶものは尾翼びよく平らに今あらし瀬戸の内海うつみの夏夕霞

水平動感じつつあり夕暮は思ふともなく母恋ふらしき

天上に桃にこげの和毛にこげをひた撫でてはかなやと言ふも我がうつつなり

たまゆらと翔るたまゆら天あめにして我がひた嚙かじるくれなるの桃

巖嶋潮満ちたらし海わたなか中と鳥居ひたりて鹿あがる見ゆ

空に観て活字函かんなす家群いへむらに都市の真実の声はあるなり

夕かげは陸くがの岬さき々嶋さきの岬さき遠ほながく見て高度かうど行くなり

雲くもの塊くれ夕紫なみに脈なみなして屋嶋ぞと思ふ嶋々暮れぬ



翼のかけ支柱に映りしづかなる飛行はつづく夕火ゆふほ照る海

ほのぼのと匂ふ淡路のそなた空飛びつつは見ゆ霞む夕浪

早や愛かなし和田の岬の夕潮に諸洗いもふごとく子らぞ混こみ合ふ

水のべの天満てんまの祭篝焚き空翔り来こし我やそぐはず

## 終篇

二十四日、我空を飛びて大阪へ向ふあひだ、妻は子らを伴ひて、太刀洗より大分なる生家へ下る。我、行を了るや、その翌の日、紅丸に乗じて、そを迎ふと航海す。かくして、別府、大分、由布院に淹留旬日、再び妻子と瀬戸の内海を渡りて歸る。その折の長歌竝に短歌二三。

## 大分にて

白雉城<sup>はくち</sup>お濠の蓮のほの紅に朝眼<sup>あさめ</sup>よろしも妻がふるさと

## 母びと

母びとはかなしかるかな。老いましてなほとやさしな。妻と来て、お許に来て、今日<sup>けふ</sup>くつろぐと、子らもゐて。茶寮には灯<sup>ひ</sup>のはひり、石いくつ水うつあひだ、彼方<sup>そなた</sup>見て、もの言ひてます物ごしのあはれ、よくぞ似る妻が母刀自、子らにもけだし。

反歌

水うちて残んの日かげ濡れたるにも  
もの言ひてます母のしたしき

おなじく

街まちなか中は瓦重なる夕かげをまだ  
じじとある蝉が庭木に

瀬戸内海

しづかや船ゆきゆく。安らや船ゆきゆく。飛ぶべくはその空飛びぬ。ひさびさや会ふべく会ひぬ。子らにしも父が母国、まつぶさに見よとし見せぬ。さて見むと、母の里をも、子ら見よと隈なく行きぬ。淡路嶋かよふ千鳥、明石の浦、このそよぐすずしき風に、親子づれ帰さ安しと、この日なか、波折光ると、甲板に鼠出でぬと、おもしろとその影見やる。

## 反歌

昨きぞ飛びて空ゆながめし瀬戸の海を今日ふなぢ船路行き波の面もわたる

空ゆ見し全き淡路の夕がすみ船はすべなもただに片附く  
また

あとのたより

君が飛ぶことごとくの人仰ぎぬと涙せりとぞ友ら言ふかも

その空は涙たまりて見ざりきと下べのその家我も見ざりき  
や

郷土と雲海

昭和五年五月、かの郷土飛翔の事ありて翌々年、われ再び、北九州に所用ありて下る。この間一ヶ月余、郷里柳河、沖端、母の里南関、外目にも帰省するを得たり。その折の新唱之なり。なほ、この帰途、再び太刀洗より大阪へ、大阪より羽田へ一気に飛翔し、感懐また新なるを覚ゆ。此篇またおのづからにして郷土飛翔吟の続篇を成す。録長歌四首、短歌九十五首。



## 歸省篇

## 月光莊雜詠

月光莊は柳河瀬高町高棕公夫君邸の離家に我が名づけしものなり。この行ほとんどこの水莊に宿る。

## 月夜

積藁に電柱のかげ傾かしぎゐて堀の向ひはよき月夜なり

この川やまだ張りすてて露あらはなる蜘蛛手の棚もよき月夜なり

註、蜘蛛手は四つ手網。

月夜なり馬鈴薯畑ばれいしよぼたの片側は壁白う照りて家やびさし廂のかげ

昼間見し麦の立穂たちほと思ふいろ月の光に見えそめにけり

きやろと啼きけろと啼きつぐこゑきけば蛙も月に出て遊あそぶらし

内庭

庭の面もに月の光のありしとき楓かへでの影も椎しひとありにし

この庭の湿りがたもつ土つちのいろ月の光にかがよひにけり

月夜照る庭の木立をちかぢかで見つつるにけり暗き渡廊わたりに

まことのみ吾あは言ひにけりよかりけり月の光に坐りつつ思ふ

註、昼講演せり。

うち白しらむ月のありどの雲のいろあふちの花は揺れそめにけり

昼

縦川を斜に見やる縁の端はに吾が眺めつつ涼しがりをる

この節句せくの粽ちまきのしろと刈る葦のいきれは繁し中分けて刈る

国つぶり節句せくの粽ちまきは梶くちなし子の実に染めてから葦の葉に巻く

誰が棄てし暑さぞ

菱の葉に白き扇のなづさへばあはれ水照みでりの夏も去いぬめり

再び夜景

とちかがみ揺れ合ふ見ればいとどしく月明りして飛ぶ羽虫あり

月の空夜の明方となりぬらし黄にあかり来る麦の穂のいろ

水郷の朝

夏の夜ははや明けにけり瓦家の瓦に赤き煙突が見ゆ

やはらかきからしの葦さやに明あかる日の光こほ恋しみわれは行くなり

荒壁あらかべに夏の朝日の照りてゐて漆の花の影もうつれり

うしろ射す夏の朝日にわが渡る土橋どはしのへりのすかんぽの花

土橋の朝まだ早し揺りゆりてそら豆売りが籠かつぎくる

花まじる深田ふけだの草の芒のぎの穂は夏の朝日に見るべかりけり

穂に立つ麦の畑の中なかみち道は弧こにうねりつつやはらかき土

しらしらと米の磨ぎ汁流れゐて藻の葉にまじる鮎あしのなきがら

つかかがむ乙おとの女め童影わらは揺れてまだ寝起らし朝の汲水場くみづに

うちしめりなにか眩まばゆき午ごの曇りあふち禱の花はいまだ了らず

### 裏町の媼

見るすでに涙はためつ。会ふすぐと眼に手はあてつ。およし媼をばろ六  
 騎つきがながれ、我が乳母めのと、そのかの一人。笛鳴るに太鼓とよむに、  
 水祭また御覧らうぜよ、舟よしと、さて棹さしぬ。蚕そらまめ豆と麦秋の頃、  
 舟舞台水にうかびて、老柳堀にしだれて、ひりへうと子らぞ吹き  
 ける、撥上げてとうとたたきぬ。見えぬをば媼、舟多きから、我が言  
 へば、さらばかくませ、この脊せにと、両手もろてあと後にす。さて負はれ、



のびあがり、見ゆと見ゆとし我が言へば、なよあはれ、  
 五十年いそとせの昔むかしの温ぬくみ、よろぼふ腰こしに力ちからを撓たむる。

### 反歌

ひりへうと笛が鳴るから夏祭なつまつり三神丸さんじんまるに小舟こぶねさもらふ

### 宮永の媼

海老腰えこしや家の子の媼おば、寺詣てらまがひで左手ひだり後あとあて、片手杖かたてづゑ、なむなむの  
 媼おば、和子わこよしと、こなたかなしと、ひさびさぞよくわせぬとぞ、

せはしとぞ、早や膳まゐる。あのよろし蟹よ蝦蛄しやこよ、それよこれ  
 よ、そをめせ、かくめせとあはれ、中つつき、殻からほじりあはれ。  
 かの和子にもものいふさまよ、雛鳥にふふますごとよ、傍かたへつき、に  
 じり寄り、さて暑さよとな、またあふぎゐる。ほれほれと箸もて  
 まゐる。その和子はかくなる歳を、老いづくを、蟹や蝦蛄しやこさもこ  
 そあらめど、身の老の、その海老腰の、おのれ知らずて。

## 反歌

すかと剥はぐ蟹の甲羅は黄のころを尿ししぶくろほぜりとりてすてたり

## 女友だち

額ぬかがみ髪がみの幼めな女め童わらは、そのごとく今も困こむに、早はやや老らいて含ふむも  
 のなし。子こをなして幾いく人たりの親おや、死しなしめて後あとのこる妻つま、姦かまし  
 と世よにいふ際きはか、さて寄よりて我われにかくいふ。そのかみよ、そ様さまう  
 れしと、ほのぼのと思おもひ秘ひめきと、とりどりやひとりびとりに、  
 吾あこそよ吾あこそよと膝ひざすり寄よせぬ。うち笑あはらぎ何なにすとすらし、泣な  
 かゆとて早はやや過あやぎにけり。見る眼まなこさへ鄙おうなの媪おきなの齒はぐきあらはに。

## 反歌

女め童わらはに目もくれずとふ男を童わらは或あるはほのにかおそれし

### 大江の幸若

筑後山門郡瀬高在の大江の幸若は今は日本に唯一のものとして珍重せらる。或る日、特に迎へられてその大江の村社に参観す。柳河の老儒渡辺村男先生の東道なり。社内、舞手と我等の外殆ど人影無く、俗塵絶ゆ。

蟬のこゑしづけき森のここの宮かうわか 幸若の舞の時ぞ移ろふ

麦の熟れ蒸すや五月さつきの野平のだひらにお宮ましまし小つづみの音

曲舞くせまひの大江幸若おほえかうわか 足ずりにえやとたたらと舞ひ澄ましける

立烏帽子たてゑぼし袴長引きち 小さな刀素襖すあをの袖は張りて舞ひつつ

幽けさは笛や羯鼓かっこの外ほかにして舞ふものならし扇手にさ指し

打烏帽子脇つれと連とが片膝に待つ間かがよふひとひらの雲

舞殿の幕は匂ふ夏がすみ後水尾の帝くだしたまへる  
とぼり みかど

人な知り宮の幸若足ぶみに遊ぶ五月のたたら曲舞  
さつき くせまひ

舞殿に舞ひつつ闌くる昼の照り撫子もちて仰ぐ女童  
た めわらは

野の宮よ翁おぎな おぐな 姫おぎな ののどのどに石につい居り舞ふを見に來し  
こ

墨の香のながれて鎮む青若葉誰に書けとふ紙かのべたる  
しづ

## 城内

裏堀は藻をかいくぐる鳩にほ居りて遙けきは啼けり城しろうち内らしも

## 或る月夜

竝倉のしづけき生鼠なまこ壁月夜にて鳩は寄りゆくその向うの葦に

ユーカーリのしろき月夜の陰かげにしてこなきも花に咲きにつらむか

## 船小屋

湯やかの館ちきい築石垣しがきの間あひ飛びて源氏蛩も早や末ならし

南関、大津山

一族、我が為に集りて、半日を清遊す。

おほつさん  
大津山 此の御宮の見わたしを族うからがものと我等すずしむ

せうたいさん  
小岱山 霞おもてむ表の端山はやまには関の名残りの書院松見ゆ



山帰来葉はらんはや山は恋こほしき日の蒸むれに餅もちひくるまむその葉摘みたむ

北の関・南の関

北の関の村は、筑後の山門と肥後の玉名の境にあり、  
 そを越ゆれば母の里南の関、関町ともいふ。

朱砂すさにして雨ふりながす朝の道山片附けば北の関見ゆ

ふかみどり櫛はじの木かげに佇たつ見れば童女どうによは愛かなし母によく似て

玉名郡たまなごほり関の山家は築つきあぜ畦あぜの石塊いしくれ黒く夏まけにけり

朱砂すさながらさびし山家の壁のいろ薄日蒸したり母の関町

## 北九州雑唱

## 宰府道

筑紫の、はし櫛こぼらの木原、木原にはゆふ夕かけ光満ち、夕光にうそどり鸞鳥啼けり。  
 宰府道、この木原に、かひどり飼鳥の、よきうそどり鸞鳥を、もつ家やあらし  
 も。

## 反歌

汗沁むる木彫の鸞うそは手にぎりて朝行きし前を夕かへりをり

観世音寺道

麦の秋夕ゆふかぐはしき山の手てに観世音寺の講堂は見ゆ

麦の秋観世音寺を罷まかで来て都府楼の跡は遠からなくに

夕あかる櫺はじの木むらの前刈りるは誰が麦秋の笠の紐づもども

水城

草ふかき水城みづき飛び越え立つ鴨かの軽鴨かるの子をうつくしみ見む

雑餉隈、環水荘

この行、この加野宗三郎氏の水荘に淹留することまた  
数日なりき。

水環めぐる環水荘は降る雨のいろとりどりに夏いたりつつ

## 昼

雑餉隈池塘ざつしよのくまつつみに映る床高ゆかき屋裏やうらに赤き金魚鉢見ゆ

菱生ふる広つつみき池塘の中道は雨通あつみらせて後あと照暑でりし

老櫓のこぼれ日あかく地あかにあるに蟻現あるる待ち居り我は

積藁あにひびく一つの爆音あが太刀洗あより近あづくごとし

夜

ほのぼのとからし焼く火の夜は燃えて筑紫郡つごほりの春もいぬめり

鬼菱の花さく池の月しろは夜のいよいよふにのち開けて後なり

呼子

名護屋城址

麦黄ばむ名護屋なごやの城の跡どころ松蝉が啼きて油蝉はまだ

韓からの空の見はらしどころここにして太閤はありき海山の上に

おなじく、山下善敏君の山荘にて

麦の秋に白帆見わたす山幾重君が館やかたは伊達の陣跡

蒼海あをうみの鯨ぶこつの蕪骨か醸み酒のしぼりの粕ひに浸ひでし嘉よしとす

ここにすゑして十時伝右衛門の裔すゑの子と一夜勢ひとよきほひ飲みて寝にける



註、柳河の旧友。

おほらかにありつる昨きぞの朝酒と再またなが眺めして名護屋にぞ居る

呼子港

遊あそびめ女が片手漕ぎする舟かとも午ひるちかき照りの入江見てあり

## 飛行篇

白日飛行吟 飛行吟その一

まさやけく夏の微塵みぢりんの澄むところみ空は青し眼の極み見ゆ

三笠山を青の尾上をのへに立つ鹿のかぼそき姿あめ天にして見つ

青丹あをによし奈良の都の藤若葉けふ新たなり我は空行く

高行くはひたすら悒鬱さぶしまかがやき横たふ雲の眼を塞ふたぎつつ

高たか蒼あを空をわがよるべなき単葉の機体の揺れは雲の撲うつなり

鈴鹿山空うつき木花咲きしづかなり飛びつつし思ふ夏ふかみけり

眼まな下したに横たふ谿は鈴鹿とぞ死の衝激をからうじて堪ふ

移りつつ雲はあるらし山やま襞ひだの赭あかきなだりに影のさしたる

雲海 飛行吟その二

雲に会ふ心したしく幽けかり高度の高さ思ふなるべし

人飛びて孀恋つまふる時し天あめなるや雲高光り音をひそめつ

しづかなる空の中なかど処うろに空洞ありて来る待つとふけだしその空洞うろ

天つ風山吹きおろし息おき長しひた吹きあつる真向ひの雲

み身ごも隠り雲がくりまます山の襞また現れて事なきごとし

雲うんくわい塊は雲塊と触れとどろけり然しか思ふは我の澄みゆくならむ

眼のかぎり雲たな置はるさながらを空にして思ふ大わたの海

噴く綿の穩おだしき雲たなの置はり影しじ繁にして熱度けぶかき

雲塊の片陰附けばかぐろ黝なる鷹ひとつ飛ぶとさまかはるなし

紫外線はげしき昼は陰黝くろき雲片附きて位置は低めつ

雲海たなの雲置はりはてなきは無風状態に置かれたるなり

挙げて光り眼は向けがたき天てんの濤なみ白雲角やくうんかくに人交りける

天てんの昼非常に光る雲角うんかくの頂てんにして鎮む物あり

独ひとり神がみ御身みみ隠みします時すらやかく雲海はありて被ひひき

雲の海に我はひびかふエンジンの命いのちなるなり航ゆくとありつつ

雲海の莊嚴をしも我が飛びていつ果つるなし心食はみ啖くふ

雲隔つ友の葬はふりど所光蒸かしていま暑からし蟬のしじ鳴き  
(沼津上

空)







羈旅小品

昭和三年盛夏、常陸大津の海岸へ児童自由詩講演に赴き、その夜五浦の故岡倉天心居士の別墅に宿る。帰途、筑波に登つて山上に一泊。「五浦少女」「筑波新唱」はその折の歌。

昭和八年十一月、福島市の公会堂創立につき講演に赴く。「初冬信夫行」はその時の作。

昭和七年一月、妻子を伴ひて信州、池ノ平に遊ぶ。

「雪に遊ぶ」はその折に作る。

## 五浦少女

## 大津

大津の浜目どほり白き波なみぎは際はを階上に見つつつビールぽんぽん抜か  
しむ

## 順礼の墓

順礼の墓とふ影が大暑たいしよにて山のかかりにあるがしづけさ  
順礼の山辺の墓は日ざかりをせせり浮きたりまり腕の清水に

五浦、潮見堂

潮見堂ここにぞ天心先生は潮眺うしほめて飽かず坐ましにけむ

唐風からふうの画像思へば大きいいまも寛ゆたけくここに居らすかも

六角堂庇にしづく夕潮の涼しきがほどを我ら佇ち見つ

五浦少女

山越やまこえよ五浦少女、日中ひなかより影をつづりて、もてなしと我にまゐると、魚持とともて来、瓶子かかへ来、五器そろへ、お膳持ふすまて来る。一閑張・筆・墨・硯、さて紙帳、くくり枕や、夜のものふすまと衾持ふすまて来る。額ぬかがみ髪めろの女童も交りて、ほつほつと、ひとりひとりに、軽き提げ重きはかつぎて、あなかなし五浦少女、草いきれ暑こみちき小徑を、潮しづく東の磯の潮見堂、その母家おもやまで、山越え野越え。

反歌

山越は日のあるうちぞほどほどに持て来てたもれ道は遠きに

おなじく

墨磨りに山路越やまぢゆると女めわら童らはや硯も持ちて幼なかるべし

少女子や山は莠はぐさの夕かげに瓶子落して笑ひたるらし

また

早や帰れ火のひとつづり見え来るは迎ひの父か山路気づかふ

印度のタゴール翁ここに泊りしといふ。

かく在りて跣坐し一夜をありけらしその縁の端と思ふに我は

天心居夜情

岩の端にことりともこの家音せぬは人坐さぬらしすさぶ夜の潮

潮ひびく君が館やかたの跡どころ小夜ふけて聴くに磯は直ぐ下した

草塚にこもるこほろぎ潮騒しほさめのとどろ立つ夜を鋭声とこゑしきりに

註、天心先生の墓あり。



## 筑波新唱

五浦の歸りに筑波の麓大宝村へ廻り、横瀬夜雨氏の邸  
にて河井醉茗氏と約のごとく落合ひ、その午後一同筑  
波山へ登る。山上へ一泊す。

## 大宝村

ここの門<sup>かど</sup>庇<sup>ひ</sup>に繁<sup>あ</sup>き雜<sup>ら</sup>草<sup>くさ</sup>の内<sup>うち</sup>外<sup>と</sup>の暑<sup>あつ</sup>さなほ消<sup>け</sup>ち難<sup>が</sup>し

庭<sup>にわ</sup>苔<sup>こけ</sup>の地<sup>ぢ</sup>湿<sup>しめり</sup>ながら日<sup>ひ</sup>おもては朝<sup>あ</sup>から蒸<sup>あ</sup>してこの大<sup>おほ</sup>き草<sup>くさ</sup>屋<sup>や</sup>

朝顔に

鉢<sup>ひち</sup>にして花<sup>はな</sup>ひらきたる朝<sup>あ</sup>顔<sup>がん</sup>の五<sup>い</sup>十<sup>そ</sup>あまり置<sup>お</sup>きて足<sup>あし</sup>蹇<sup>なへ</sup>君<sup>きみ</sup>は

朝<sup>あ</sup>顔<sup>がん</sup>の幾<sup>いく</sup>花<sup>はな</sup>鉢<sup>ひち</sup>や張<sup>ひ</sup>る肘<sup>ひぢ</sup>の君<sup>きみ</sup>嚴<sup>いづ</sup>かしく膝<sup>ひざ</sup>は平<sup>ひら</sup>らに

雲<sup>う</sup>居<sup>ゐ</sup>立<sup>た</sup>ち紫<sup>むら</sup>にほふ筑<sup>つく</sup>波<sup>なみ</sup>嶺<sup>ね</sup>を麓<sup>ふもと</sup>に堪<sup>た</sup>へて足<sup>あし</sup>蹇<sup>なへ</sup>君<sup>きみ</sup>は

## 山毛櫨と青がへる

筑波嶺つくばねのいただき清さやにうちひびく山毛櫨ぶなの林の青がへるのこゑ

筑波嶺のいただき通る夕立よだち雨わたくし雨のくだり去りにし

山毛櫨ぶなの原朝居る雲のつぶさには下しづくして音果つるなし

小筑波や山毛櫨ぶなの下枝しづえの若萌に蛙ころろぐこゑのさやけさ

筑波嶺のいただきよりぞ見おろして雲はうち乱る 表おもてうら裏うらとなく

にひばり筑波をくだりあはれあはれケーブルカーの索条はや迅し

夜雨、山にのぼる

見てのみや泣きてこらへし筑波嶺を君いまはのぼる人が背そびらにて

君を負ふ人の後蹤あとつきのぼる道石ころ暑し赤き角かどかど々

山のぼる人の背そびらゆもの言ひて筑波根草は君が教へし

まだ見えて人の背せにある君と思へ頂いただきの雲のいまはつつみぬ

高たか天まが原はら男を峰みねの岩のいただきに影黒くある君と思へや

夜

夜雨氏夫妻も泊る、生れて初めての蜜月遊ぞといふに、

女め男をの峰ひとつ筑波の頂にうべ鎮しづもらすこの夜いみじく

筑波嶺の男峰落ちゆく雲あらしふりつつもあるか下の葉山に

翌日、昼

負<sup>おぶ</sup>さりていや暑からしのぼりける眼<sup>まな</sup>ざしたゆく今は下<sup>くだ</sup>りに

筑波嶺にひとすぢかかる男女<sup>みな</sup>の川早やたえだえに君はありにし

筑波の帰りに

ここに見る霞ヶ浦は採る魚のわかさぎ色にしろく霞みぬ



## 初冬信夫行

伏拝を越えて

伏ふしをがみ 拝がみ 越えつつくだる道の奥だうそ道祖その神かみに幣ぬさたてまつる

伏ふしをがみ 拝がみ 越え来てひろふ日のあたりこれよりやいよ奥おくのほそみ  
ち

人ひと像がたと藁わらの小積こづみは数かず立ちてなほうそ寒ふき刈田かりつづくか



## 文字摺石

みちのくの信夫文字摺かくながら日の寒うある岩の面もにして

冬日ぐれ文字摺石の傍遊わきぶ子らが石蹴り音ひびきけり

## 福島対岸

ちびと啼く花吸鳥はなすひどりは水さむき阿武隈越えて何にかも来こし

雪に遊ぶ

池ノ平

清らけく雪に遊ぶは白鷺の水あさりするたぐひならまし

今朝ふりて清明さやけき雪や積む雪の踏めば粉きよに立つその浄きよら雪

雪の原霧華きばな咲き満つまさしくも白くさやけきこれやひといろ一色

風やみて紫にほふ雪のひだ襞この片陰つどに集ひて居れば

妙高温泉へ下る

からまつ落葉松にゆふこなゆき夕粉雪ぞつもりける末うごきつつしみらなる枝

落葉松に粉雪ふりつむ日くれがたひた滑りつつ我はありける

積む雪の下深くゆく水あらし風かとも聴くにせせらぎにけり



滿蒙風物唱

昭和五年三月より四月にかけて四十余日、満蒙各地を巡遊す。満鉄の招聘によるなり。その情報部の八木沼丈夫君と同行す。歴遊するところ、大連を起点として満鉄沿線及び東支鉄道は満洲里に至る。尚ほ長春吉林間、奉天新義州間を往復し、また大連へ還る。即ちこの満蒙風物唱成る。うち二百十一首を録す。

## 遼東春寒

## 東鷄冠山

寒<sup>かんげつ</sup>月は谷を埋むる屍<sup>しかばね</sup>にまた冴えたらし或<sup>ある</sup>はうごくに

命<sup>いのち</sup>にて一人一人と跳び入りしまた声もなし塹<sup>ざん</sup>の深きに

息はつめて死角<sup>しかく</sup>に對<sup>むか</sup>ふ敵味方この壘<sup>るゐ</sup>の中に敢て憎みし

春ならぬ寒かん靄あいにしも日は照りてこの低なだり小松繁かり

春寒き旅順の港見おろしてましぐらに駛はしる自動車今あり

大連、碧山莊

碧山莊は華工の收容所なり

碧山莊へきざんざう冬ひなたの日向ひなたを来くる影かげの濃のくしづかにて担たふ水桶すいぶく



影つけて日向選り来る荷かつぎの肩かへにけりたぶつく水桶

その裏山

人ばかり大蒜の香のはげしきは中分きかねつ旅に来てあり

春山と山をうづむる大群の苦力さもあれや空は霞まず

軽業の子らひるがへる柱より光る春かもや山はとよもす

鳴くまでは白霊の籠手に据ゑて爺ぞ居りける春のひねもす

春なれや苦力クリーの爺ととは呆ほけ笑ゑみて十尺とさかの煙管きせる吸ひくゆらかに

くらくらと牛の頭づ煮たつ大釜の湯けぶりにしもや夕日ま赤き

丸揚げと揚さぐる魚かなは手づかみに早や投げ入れて安けきごとし

大連図書館にて

はげしかるピゴの漫画をかしとし泣きて遊ばむ旅にあらぬを

## 金洲

冬来り 城<sup>じやうへき</sup> 壁<sup>へき</sup> の上に立つ影の我にしもあるかひとり見おろす

岱<sup>たい</sup>宗<sup>そう</sup>寺<sup>じ</sup> 咽<sup>ね</sup>ぶ胡弓の音は引きてまだ薄<sup>かん</sup>日なり寒はゆるまず

## 熊岳城

熊<sup>ゆう</sup>岳<sup>がく</sup>城<sup>じやう</sup> 雁<sup>やう</sup>わたるなり仰<sup>あふぶ</sup>臥<sup>ぶ</sup>しに春寒<sup>と</sup>き外の砂湯にぞをる

望<sup>ぼう</sup>見<sup>じ</sup>山<sup>さん</sup> 吹<sup>ふ</sup>き曝<sup>さ</sup>らす風の風<sup>かぜ</sup>さきは仰<sup>あ</sup>向<sup>む</sup>きに臍<sup>へそ</sup>の寒<sup>さ</sup>き砂湯や

砂湯にてかじる林檎は喇嘛塔ラマたふの風寒きからひた紅あかき噛む

春はまだ河原の砂湯上寒し風邪ひかぬまとそこそこあがる

枯野行く幌馬車マアチャの軋みきこえゐて春浅きかなや砂塵さちんあがれり

湯崗子早春

湯崗子たうこうし凍しむる竝木あひの間にして帽子マオツの赤きつまみが行くなり

湯崗子氷は厚し我が買ひて赤き山さんざし 子をかき噛りつつ

遼陽

仰ぎ見てさむざむとある白塔はくたふの薄日なるなり巢くふ鵲

騾らと馬と並び曳き行く荷の車焼ランチウ鍋かめならし甕高く積む

泥ぬかるみ濘ぬかるみは薄日の土圀どゐに片避かたよけて人影た顕つかそのほつほつに

寂びつくし楊やなぎも土圀どゐもあらはなりこの冬の日の道をひろふに

冬ふゆ楡にれにしらしらとある日の在あり処ど土圀ど曲り来て我は仰ぎつ

黒豚の仔豚走り出で陽は寒し観音寺山の表おもを来くれば

## 奉天南北

## 奉天北陵

かささぎ  
 鶺鴒の声行き向ふ北の晴はれほくりよう北陵の空に雲ぞ明れる

太宗文皇帝の陵みささぎとふ北陵はけだし松の陵みささぎ

霊みたまや廟の南おもての日のあたり氷は池にかがよひにける

牌楼パイロウの影は日向ひなたと閑しづかなり  
 狛犬こまいぬが見みゆるうしろなで肩

奉天北陵の壇道だんだうを踏ふみのぼり来てひえびえとよし春の松風

寒空さむぞらにい照あり映うつろふ黄いらの薨目らかもあやにしてここは靈廟みたまや

森ふかし対つひ衝立ついたつ石獸せきじうの影多くして音無かりけり

陵みささぎのこの松かげに人をりて茶をたつる湯氣のほのぼの寒し

風鐸すずの音四方おとよもに起りて春あさし隆恩殿に向ひて歩む



朱砂すさの楼隆恩門に我が向ふ内庭うちにはさむし斑雪はだれ吹く風

帝王のただに踐ふましし玉ぎよくの階我ぞ踏みのぼる松風をあはれ

丹にはしらの柱黄金ら薨つかの端つまにして寝陵しんりようは見ゆ円まろき枯山からやま

鳶の声澄みつつ舞みへれ陵みさの槐せんじゆは枯れぬ墳つかに槐は

角楼は石階いしきだ狭せまし傍わきのぼる高壁たかかべの内うちと外雪うちとこごり積む

## 瀋陽東陵

ひむがしのたふとき山の陵みささぎの松ふか邃ふきところ古ふりしみたまや靈廟

陵みささぎの山のおもての浅茅原あさぢはらいたくも荒れぬ松はふか邃ふかきを

松が枝えに粉雪こゆきちらつく日の曇くもり何鳥か啼けりあはれ陵みささぎ

反高そりき磴道とうだうを来くる人ひとり東陵とうりようはげに冬によき山

山水あをにかはらに青丹瓦あをにかはらぞ古りにける美豆良みづらの唐子描からこかかばこの前まへ

茶膳房雪ちらつけばかささぎの声うちみだり松くに来るかに

鵲つばきの飛ぶ影見ればふりみだる雪おもしろし黒と白はねの翼

誰たがこもる庫裏くりの障子ぞ廂けぶり這ふ煙はしろしほのぼの湯気

撫順

露天掘ま澄みか碧あをき空そらぎは際を音とどろきてまだ余寒なり

天を摩す鉄のパイプの太腕ふとうでに重油ながれ落つる音は聴くべし

三月は石炭壁に沁む雪の斑雪はだれが碧し輸炭車湯気噴ふく

炭層たんそうに千歳ちとせうづもる蓮の実も芽を吹き花の日に匂ふちふ

家の苞卵つとほどなる大きなる瑪瑙の玉は妻に賜たぶべし

青きもの摘む子らならし笊寄やこるせて石炭殻は指に搔そき除く

長春近づく

黒煉瓦焼く火の火口夜は見え<sup>ほぐち</sup>てけしきばかりを寒<sup>かん</sup>ゆるぶめり

長春駅

日は黄なり屯<sup>とんづみ</sup>積高き豆粕に噴き立つる汽車の煙影引く

鉄の罐<sup>かま</sup>の大き機関車まおもてを鐘うち振れり為すあるごとし

国際列車とどろ湯気噴く罐<sup>かまなり</sup>鳴のじんじんと澄みて待つあるごと  
し

移民の群

曠野あらの行く四等車といふに面群かほれて生きたかりける冬も頼たのめし

鵲と楡

公主嶺

公主嶺馬駆る見れば裸馬らばにして著ぶくれの子が風あふり来る

寒々さむざむと屯たむろし移る羊にて端驚はしけば皆騒さわめきぬ

汽車は北へ

旅人我汽車の窓べを飛び過ぐる木の葉のごとし風に追はれぬ

群れにけり曠野寒きにぶしゆぶしゆと黒豚づれが土饅頭食む

十三時

家の影隣に映り冬日なり表しめたる村のひそけさ

端の反り同じ影もつ家どなり春先といふに寒き陽にあり

浮雲 一間堡にて



幽かすかに我は見るなり浮雲の  
 二ふた塊くれ三み塊くれ野の空のはてに

難民ならし

いづくへ行く群ならむ空低く雲黄なる野に人つづき見ゆ

或る枯野

ただに見る影と日向の曠ひろき野につづく楊やなぎのすがれ木にして

冴えにけり楊やなぎは玄くろき根の土に春ぬくの温みの未いまだいたらず

ちかぢかと我は眺むる野の日向遊からこぶ唐子の影走りをる

### 冬楡

墨にして或あるは匂はむ枯から山やまの楡にれのほづえの細ほそ描がきの線

冬の楡しみの繁みにほそき髪かみの毛は梳す櫛くしの齒はに梳すく細こみなり

冬に観る楡の寒けき墨いろは毛描かの線に描かかば描かくべし

## 冬榆 その二

冬ふゆ榆にれのしみみかぐろ黝くろきほづえにはかささぎ鶺鴒かささぎらしき巢もあらはなり

しばしばも見つつ越え来つからやま枯山にれや榆やなぎと楊やなぎの寒き日の色

## 寒きびし

条すぢほそくひま隙漏る冬ふゆの日の光鶺鴒かささぎの巢は枝にこごれり

寒林かんりんに石廟せきべう小ちさきこのあたり糞叉子フンチャーツ搔かきて人暮れ早し

石壁せきへきの銃眼じゆうがん透とほす空のいろ高粱カオリヤン稈がらは積みて冬なり

氷閉ぢきびしくしろき川ひとつただにかびろき枯原は見ゆ

或る野の夕光

くだら野の窪処くぼどの氷ほの青し日の夕かげの近づきにけり

日おもてと家群いへむらなごむ畑なだり高粱カオリヤンの根はよく鋤きにけり

夕日照る 枯山からやまなだり地に引きてその木がたもつ影のしづかさ

車挽きて驟らと驢馬ろばと行くしづかなる夕かげの野に我も在るなり

夕光ゆふかげの疎林におよぶ野の平音たひらきしませて行く車輛らし

平たひらけく枯野からのに明あかる夕光ゆふかげの遠とほ及びおよつつ寒しともなき

行くものの何とはなけれ移りゐてうらめづらしき夕光ゆふかげのいろ

夕光ゆふかげのかくうらなごむ枯野からのには色すらも声に顕たちて匂はむ

## 根黍

朝あさ光かげの此方こなたゆ射せば縞目なす 高カオリヤン梁ンの根は雪のごと見ゆ

畝うね竝なみの冬ふゆ枯根黍がれねきびはてしなし夕あかかげ明あかく満ちあかにけるかも

落つる日に我がひた向ふ野の原は光しみつつすぐろなる土

朝出でてひとゆきかへり一往復ひとゆきかへり鋤くひとゆきかへりのみに日の赤く落つるここは大陸

地平より根黍鋤こき来し  
大きき人今正面まともなる入日に赤し

興安嶺を越ゆ

興安嶺を越ゆ

落葉松

興安嶺黒く繁しみ立つ落葉松からまつの林は寒し雲の上へに見ゆ

雪の線劃かぎりて黒き落葉松の群落ぐんらくはよしほそき木の梢うれ

谿なだりしづもる雪の片空は木群こむらが黒しほそき落葉松



落葉松の木群こむらが梢うれに立つ霧はかがよふ谿の雪解くるなり

札幌屯を過ぎて

岩膚の岱赭に蒼む色見れば斑雪はだれの雪解ゆきげ下滴したたりにけり

山中

興安嶺越えつつぞ思ふこの山やまさしく大き大き山脈やまなみ

日をつくし大き螺らじやう状じやうにのぼるとき興安嶺は深しと思ひぬ

白樺樹林

のぼり来て眼も澄みにけり雪の原に白樺の林しみみ光れり

谿たにの秘ひそ所雪の山原に細り立つ白樺の幹は光さ発さすなり

細木原しろく直立すぐたつ白樺の木はだは清し雪への上に立つ

雪線

ここ過ぎて雪は空より新たなり山ぎはの線はいふばかりなし

北の秀ほの雪に思へば霾つちふらし低居ひくゐる雲よ遠く来にけり

雪の皜眼ひだもすさまじくなりにけり天あまそそり立つ黝くろき岩角いはかど

山の秀ほや真澄みて青く流れたる稜りようせん線せんの空を飛ぶ翼つばさあり

春あさき黄と青磁との蒙古の市海拉爾いちハイラルあたりよき气流なり

興安嶺くだりつくして野は曠し赤き落日いりひに汽車はま向ふ

ハルビン  
哈爾賓

松花江

松花江スンガリ 解かい 氷ひょう 未まだ し 橈こ にして 船腹ふなばら 赤あか き 際きは まで 馳はし る

松花江スンガリ の 鱸凍すずきほ れる 春早はるはや き 哈爾賓ハルビン の 朝あさ の 市いち に行くなり

太陽嶋

霧ふかし頭づよりかぶれる紅あかき布牛乳きれの壺をかかへたるらし

さすらへば命に換ふるなにもものも売りつくしけりその愛かなしきを

詣みづらく朝の弥撒ミサにし毛あかの紅あかき産子うぶご抱だきて母貧しかり

太陽嶋夕づく塔に鳴る鐘の影ひたすらや振りにつつあり

墓地

露西亞びとは都大路の見とほしに先づ墓地を定め寺うち建てぬ

露西亞びとはみ墓樂しと花植ゑて日曜は来る椅子しつらへぬ

キタイスカヤ

キタイスカヤ昼のほのほと職待つと手斧てうなかたへに人い寝こけぬ

春早し何の刷毛はけかも丈たけなるを鳥毛と立ててベンチにはゐる

街の角冬は日向とひろげたる檻ぼろ褌のつきはぎに老嫗おうならありき

脛はぎの線颯々と行くいつくしき高踵靴ハイヒール見れば春早むなり

旅情

木製の羽折はねる黒き大鴉カラス旅にし冬は買ひてかかへぬ

秋チュウウリン林リンを出て来て思ふ露西亞の血と朝鮮とまじり少女なりにし

流離

(白系露人のさまざまをまた)

国破れ人はさすらふ毛ごろもの氷の粉屑吹きよごれつつ

凍傷とうしやうの膝に藁巻きみざりける爺おぢさが富める外套は見よ

酒みづき白髪しらげうな嫗は前伏しにその戸の段きだに白夜はくやごごえぬ

弾く手には破れ手風琴も鳴るらめど盲目めしひ眼は開かずあ白夜はくや昼ならず

松花江支流

橋がまへとどろ退そくまもしづかなりわが汽車ゆ見る結けつ氷ひょうのい



ろ

声はして夜の汽車の外とに消えにけり今た発ちたるは蔡家屯ならむ

沙漠の移動

四平街

聞くだにも寒き鴉のま冬には空うづむとふ街に見あげつ

我が聞きて声泣くごとし夜酒欲<sup>ほ</sup>る自<sup>し</sup>が外<sup>ほか</sup>にまた影もあらぬを

声荒<sup>あら</sup>ぶ幌馬車疾駆し星近<sup>さん</sup>し三寒<sup>さんかん</sup>にしてひびく暁

鄭家屯郊外

外蒙古西吹きあげて東する沙漠の大き移動をぞ思ふ

註、蒙古の沙漠は東へ東へと移動しつつありと云ふ。

み冬の夕かげあかき砂すなの原空そらめ眼薄らに駱駝来れり

蒙古びと駱駝追ひつつ夕べなり早駟あとしりけに乗る驢馬の後尻

霾つちふらす黄沙わうさの平たひらただならず日は朱あけに澱をどみ蒙古犬吼ゆ

註、霾るとは遠く沙塵の黄濁するを云ふ。

ひた駈けに黄沙わうさの原を乗り進む蒙古の騎馬は後ろうし見ずけり

毛ぶかくて両もろの耳蔽ふ蒙古帽彼ら怖れずその眼の光

黄沙わうさの原騎馬走る見ればおのづから直ただに専もはらに道とほりけり

蒙古モンゴル児陀羅海低き沙丘の起おき臥ふしの涯はてしもしらね草枯れにけり

蒙古風吹きもつくすか石積みて山はただ一つ低きオボ山

眼を放つ草原さうげんの枯れ涯はてもなし牛跳躍す落つる日の前

放射光ほうしやくわう日は金色こんじきに凧はたけぎにけり地平に寒うれき梢の冬楡

未開放地みかいほうち目も遥かなり牛馬豚羊まさしく小さく群れ移ろふ

註、未開放地とは蒙古の主権を以て、未だ他国人（支那人をも含む）に開放せざる土地なり。

行く行くに一つの部落あり

真名井まなゐわく沙漠のかげのひと屯たむろただにあはれに家居しにけり

宿舎にて

鄭家屯落つる日赤し畳にはざらつく砂の数光りつつ

傳家屯にて

傳家屯フウカトン 夕かげ暗し地に低き土の家群やむらの煙あげつつ

赫爾洪得

赫爾洪得ハラハント 夕日の照りにうつら出て駱駝もた黙居り高き砂山

蘇支交戦の直後なり

赫爾洪得ハラハント 廢墟の窓に見とほして落日らくじつ赤し汽車はひた行く

地平の落日

此所ここにして地平は高しはろばろに雲居垂れたり日の落つる雲

雲かとも山かとも思ふ地の黝朱うるみ蒙古は曠ひろし日も落ちはてぬ

雁かりわたる青磁の透る空のみぞ地平に残り砂山すなやま暮れぬ

外蒙古雪のこるらし秀ほに浮きて遙けき山は島のごと見ゆ

砂丘つづく



砂窪に泡だちしるき雪のいろ夕光ゆふかげにして今は解けつつ

柔らかと砂山の雪の薄ねずみ夕棚ゆふたなぐも雲の色ふくみるる

砂窪ほでに火照り沁み入る日の暮は眼をつぶるまもけだし匂へり

塩包

影ここだアンペラこづ小積む塩しほづつみ包つみいま逆光に赤き日はあり

満洲里

## 風車丘

蘇滿国境春冴えかへり砂山の低山斑雪また吹き曝れぬ

満洲里風車片破れ吹き曝るる残雪の丘に寒ぞきびしき

砂寒き低山の裾を来る駱駝後先の影が夜明いばえつ

暁星や上眼駱駝はみ冬月庫倫よりかもこりもこり来し

風車丘ふうしやきうここにし立てば西伯利亞の低山つづき雲うみこごる見ゆ

### 駱駝の宿

内蒙古春おぼろならず早やい寝て駱駝が宿は月に鎖さしたり

駱駝づれ月夜寒きに膝折りて 高梁稈カオリヤンがらの下ひびくらし

影多さはに瘤ある駱駝膝は折りいづ方となき上眼うはめしてあはれ

南満春来る

吉林

旅にして 春しゅんぢん 塵ぢん しげししばしほも熱きしぼりに面かほをあてつつ  
(二首汽車の中にて)

熊出でて昼立ち歩ありく森の街敦化まちの雪も春は解とけなむ

漣や筏を洗ふかがやかし解氷期近き 松スンガリー花江見ゆ

流りうひよう 氷ひよう に添つひつつ笑わらふ漣せきの春はるかがやかに果はしらぬなり

北山にて

春霞はるがきむここに花はな咲さき我われが居いらば武ぶ陵りよう桃たう源げんの思おもあるべし

北山ほくざんはのどけきみ山やままる山の低ひく山やまよろひ匂におよき山

風かぜの音ね喇ら嘛ま塔たの背せに起たりしが春山はるやまなれや照てりつつ止とみぬ

昼霞あそ青丹瓦あそのしづもるは春山はるやまゆゑにかがやかにして

旅舎

旅やどり匂やかなる窓の外との夕かげは見て何をとも待つ

三人の満人の姿夢に襲ふ

幽いうこん魂こんの来り哭なくなる夜のほどろ春はるさむ寒むにしも酒やさめにし

南満春来る 吉林長春間

飲馬江インマホウその水のべに飲む馬の白きが匂ふ霞となりぬ

雁ガンの群今かへるらし雪のこる遠山ゑんざんの空をわたりて過ぎぬ

樽くれひき挽そは反るとかがむと手もゆたに大鋸おがの長柄ながえを対むかひ揺り挽く

木叉ムウサアシ子頬こほにあてて佇たつ藍の服木根にも春はかがよふらしき

氷解け春の池塘つつみは遠目にも漣の刻み一面なれや

春いでてこそり耕す鋤の刃はは漣なしてかがやき連れぬ

春しゅんちゆう 昼ちゆう や根黍かがやき黒豚の仔豚連れ走りよき霞なり

春は今農用馬車の野に見えて二頭三頭四頭早や前駆けぬ

見てよきは春の広野に輝きて耕馬かうまがたもつ揃ふ足竝

春夕

トオフイヌ  
 土糞搔ヌきほけくらす人居りて春あたたかき夕ゆふ光かげめづ珍づら



春ゆふべ野焼の跡に佇める白き馬見れば尾に遊ぶかに

春の野は唐子抱ける母も出て夕陽こもれるよき空気なり

春夕はひとり野歩く馬をりておのづから帰る道知るらしき

早や点し物恋しかる灯のいくつ満洲にして春は幽けき

本溪湖

天霧らし降る雪見れば鵲や早や群れ飛び来いづこよりとなく

鵲は雪ふり乱る空にして色まぎれなしかへ翻り羽はばたく

春しゆんせつ雪せつのひと降りゆゑに飛び乱る鵲の羽もつやにた顕つめり

本溪湖影清らなり 春しゆんせつ雪せつの後あと冷びえにして空の晴れたる

五竜背

衣きぬそそぐ水にかあらし芽楊そともの外面光りて波紋のみ見ゆ

疲れけりとろむ蛙の音ねは聴ききて五ご竜りゆう背はい温泉はにどかと足投く

田は鋤くきてまた冷ひえたらし土はの端はに斑は雪だの色の明れる見れば

### 国境の春

解かい氷ひようの渦うず巻まきすごき黄わうの濁じやくり鴨あひ緑りく江えはむべ大河たいがなり

一ひと夜よに春はるいたりけむありなれ河が氷ひ張はり裂ひけてとどろろきにけり

鴨あひ緑りく江え照ていりひろびろしあきらかに流りう氷ひようを追おうて材きを流ながすなり

鋼橋かうけうの遠とほき正面まともゆ来くる子こらが衣手あか紅あかし目めに近ちかづきぬ

春はるまさまさに国くにの境さかひの大おほき河氷かひとどろろけば冬果ふゆてししなり

遼陽の春

春霞はるむむ白塔はくたふなららしししららと我われが見みる方かたに今いまぞ見みえつつ

湯崗子の春

湯崗子ゆがし遠とほく来きりてああははれああははれをししどり鴛鴦うんおうの湯ゆにひとり浸ひるも

うちこそぞり湯川にとろむ墓ひきのこゑおろかながらに春ぞふけたる

ニヤンニヤンメウ  
娘々廟かすむ日紅あかし見て居りてここらは低きいくつ枯山からやま

鞍山あんざんはまことよき山よく枯れてよき鞍型の春さきの山

金洲を過ぎて

大和尚山ねもごろ霞む麓べは春かたまけて  
紅梨ホアンリイの花

旅終る

山すそに桃の花さく大和路に茫漠とありし我が旅果てぬ

夢殿

昭和三年初冬、国醇会の一行と正倉院拝観に赴く。その所産、「春日の鹿」「正倉院御物抄」。

翌々五年春、満蒙旅行の帰途妻子と奈良に遊ぶ。その所作、「奈良の春」。



## 春日の鹿

## 三笠山

まともに見る三笠の山の朝霧はまさしく寒し奈良に来てあり

三笠山冬来にけらし高々と木群こむらが梢うれをい行く白雲

鳥毛とりげぐも雲風吹き乱りみ冬なり三笠の山のここや裏うら峯そば

## 正倉院前

朝ぼらけ春日野来れば冬木にはふたきだ一段白く霧ぞ引きたる

森の手に寒き校あぜくら倉足騰あがり正倉院は今ぞ大霜

春日神社

山茶花の朝霧ゆるかたへに傍行く鹿かの子の斑毛まだらいつくしく見ゆ

耳みみたぶ朶なかじろの中白かのこの鹿子雫して朝見あげある山茶花の霧

公園

頼めなく夕かがやかし  
神かみなづき無月わかくさ山の日あたりのいろ

つれづれとつくばふ鹿のいくたむろ  
夕ゆふかげ光の野にあらはにぞ見ゆ

鹿のかげほそりと駈けて通りけりかがやき薄き冬の日の芝

冬薄日うらなく遊ぶ鹿の子のうしろ躓つきつつ我も寒かり

二月堂

二月堂つくばふ鹿のつれづれと目も遣るならし寒きこの芝

秋の鹿群れる遊べど寄り寄りに立つもかがむも角無しにあはれ

猿沢の池

冬ちかき池のほとりの夕日向うつらとどまり鹿ぞ立ちたる

春日野

夕日洩る木の間に見えてかぼそきは連なき鹿の影ありくなり

鹿のこゑまぢかに聴けば杉の間のま一木のひとき黄葉もみぢ下明るなり

群の鹿とよみ駈け来る日の暮をひたととどまり冬は幽けさ

春日野の夕日ごもりとなりにけりさむぎむと立つ鹿の毛の靄

### 夜の小路

いつまでかもとほる鹿ぞ夜の街まちの家やなみ竝の庇霜くだるなり

庇<sup>ひ</sup>間<sup>あは</sup>や奈良の夜<sup>は</sup>ふけに<sup>ひ</sup>顯<sup>た</sup>つ影の大きな鹿のもそと来てあり

池をへだてて

猿沢の柳の眺めさびにけり余光<sup>し</sup>暫<sup>ば</sup>ある興福寺の塔

池向ひ築<sup>つ</sup>地<sup>い</sup>に明る冬の陽<sup>ひ</sup>のけ寒<sup>ひ</sup>き下坂<sup>くだり</sup>鹿<sup>あ</sup>歩<sup>あ</sup>りき見ゆ

## 正倉院御物抄

とりがしらうるしのこへい  
 鳥頭 漆胡瓶 かすかなりしろがねの鑠くさりうつつにぞ曳く

らふけち  
 臍けもん 纈ぎょうの花文の象はましろくてただに浄きよらの命寂さびたり

## 鳥毛立女屏風 一首

樹もとの下に出いで立つ女丹をみなの頬ほして陽ひは豊かなる香かぐはしき空

ほのぼのと貴き昼は我が入りて宝蔵の古りし墨に思はむ

金銅こんどうのこごる鳥首とりくび水瓶みづがめの口ほそうしてみ冬なるなり

雑塵ざつちんの遠世とほよの裏うち透かし吾れ命あれや光り息づく

をとめ子の紅牙こうげの尺は花鳥はなとりの目もあてにして稚をさなかりけり

黒柿の蘇枋の絵箱山水やまみづのながらふる音はしろがねに描かく



## 奈良の春

## 法隆寺にて

四十日にわたる荒涼たる我が満蒙の旅は、寧ろこの法隆寺を美しく見むためなりしが如し。

日の照りて桜しづけき法隆寺おもほえば遠き旅にありにき

朱砂すさの門春はのどけし案内者あないしやの煙管くはへてつい居ゐる見れば

春日向人影映る東院の築地ついでちがすゑに四脚門見ゆ

夢殿

董咲く春は夢殿日おもてを石段いしきだの目に乾く埴土はにつち

夢殿に太子ましましかくしこそ春の一日は闌ふけにたりけめ

夢殿や美豆みづら良結ふ子も行きめぐりをさなかりけむ春は酣たけなは

日ざしにも春は闌たくるか夢殿の端はぞり反いみじき八角円堂

春日神社

馬酔木あしび咲く春日の宮の参まゐり路ぢを蝙蝠傘かうもり催も合やひ子ら日暮なり

夕寒き庇のつまに影あるは燈籠吊れり雨のふりつぐ

春日の夕闇の廻廊わたり行くほどはほの明あかりありて霧の春雨

柳なぎの葉にふる雨見ればしらしらと含ふむ馬あ酔し木びも夜の目には見ゆ

大仏

灌仏会に参りあはせて

大仏殿にほふ霞の外とに据ゑて灌仏堂は小さき花御堂

浜名の鴨

昭和七年十月、遠州浜名湖畔鷺津に遊ぶ。「浜名巡航」

「本興寺林泉」成る。

翌八年一月再び鷺津の本興寺を訪ふ。「続本興寺林泉」

「白須賀」続いて成る。

## 浜名巡航

## 鷺津より

冬すでに雲は低きを船立ててうち出来でにけりひびくみづうみ

## 館山寺内外

館山寺くわんざんじ松山おだ穩うみし湖うみを来てここは小春の入江さざなみ

秋晴の入江の水戸のさざらなみ鷹一羽来り屋やの上へにはをる

この船をすでに追ひぬきうち羽振はぶく鷹いさぎよし西北にしきたの晴

引佐細江

奥の瀬の引佐細江いなぎほそえの冬水照り船入り進む音はじきつつ

波切といふところにて

ほの寒き鹹しほと淡水まみづの落合は蛤すの渚すもあはれなるべし



## 浜名の湖

遠つあふみ浜名のみ湖うみ冬ちかし真鴨まがも翔れり北くらの昏きに

冬いまに居つく秋あき沙鴨か波切の渚うちすの瀉に数寄る見れば

冬の湖うみに見てゆく鴨の沖ベにはつぶつぶとひたり羽音すらなし

風や冬とよみ飛び立つ大おほ族やから総そう立つ鴨の羽ばたき凄し

すれすれに波の面も翔かけるひと列つらはすべて首伸べぬ羽ばたく青鴨

鴨  
羽ばたき頻りにして鎮しづもらぬかなや立つ波を北へ翔かる鴨南へ来くる

乱り立つ鴨の羽音の高処たかどにはすでに幾羽か小さく飛ぶ影

## 本興寺林泉

鷺津の本興寺は法華宗の古刹にして、その林泉の幽寂なる、譬ふべきなし。池にのぞみて、懸樋あり。

所望されて、一首

水の音ただにひとつぞきこえけるそのほかは何も申すことなし

## 林泉を、また

水の音聴きつつをればこの林泉しまに満つるこほろぎの声もしづけき

蓮の葉の水に影おとすうしろには低どほしき土橋ありて樽くれの橋桁

このごとき閑しづけき林泉しまの日あたりはただに眺めて坐りてをあらむ

物寂びてなにか豊ゆたけきここの林泉しまよく聴きてあれば朝はしづけさ

朝曇うち対むかふ山の後あと空ぞらも眼にしたしかり鴨の飛ぶ影

本興寺の庭はこれかとさもこそと観てを居りけり十月末なり

続本興寺林泉

山内

高野槇喬たかくな竝み立つ冬の晴君はれが御山にのぼり来にける  
（日瞻上人に）

夕ゆふ早くき庫裏くりのはひりは日たむろと築地ついちめぐらして朱あかき中ちゆう門もん

懸樋の音

水の音ただにひとつぞきこえけるふたたび籠りみ冬にぞ聴く

水の音まさにはびけり聴きてみて夕かげ近き冬のこの林泉しま

池の面に落ちつとほる水の音懸樋かけひは冬のものにぞありける

樋ひより池に落つる清水しみづの音にしてひとところただにうち凹めつつ

林泉矚目

さむぎむと石いはに映うつるはみ冬づく水の影ならむ観つつ幽けき

刈りこみて段きだおもしろき細葉ほそば植まふゆの日ざしのあたるともなし

群葉むらば張る蘇鉄のそよぎ今見ればひたとしづもり寒き日のいろ

鳥の羽の冬毛ふゆげの雲ひとながれみづうみの方は空ぞ晴れたる

山茶花のはつかにのこる梢うれのいろ面おもて冷えながら檜葉ひばと親しき

土の橋かかり低きに糸檜葉いとひばのほそぼそと垂れてみ冬ありける



糸檜葉しだの垂えり枝見みぎれば汀はにも夕ゆふ光かげおよび暮くれれがたみあり

いづく洩よる冬ふゆの日ひざしぞ赤松あかまつのそこばくの幹みいとど明あれり

風かぜさむく椎しいの葉はさわぐ林泉しんまの山やまや松まつの木立きだてはこぼれ日ひのして

客殿きやくでんの角すみがた型がた屋根やまねにさすあかりつくづくとあふぐ西にしも寒ふかり

短みじ日かびの寒ふきこずゑのちの後のちあかりとんび鳶とんびくだり来く羽根たを撓たをりつつ

俗に文晁寺といふこの寺には、文晁の四季の大壁画あり。就中春の絵ことにめでたし。

春の山しづもる見ればおほどかにほひこもらひ墨の画ゑの山

橋の上へを友がり恋ふる人のかげ雪しろきゆゑに墨画おもしろ

(冬)

余響

玉葉坊を俗に坂寺といふ

坂寺の高垣見れば槇垣に山茶花まじりいつくしき靄

文晁寺<sup>てら</sup>まかで来つつも犬の仔<sup>こ</sup>の戯むる見ればこれも冬の画<sup>ゑ</sup>

常靈山本興寺より湖水に向ふひとすぢ道唐辛子赤く掛け干しにける

近藤医院の横を過ぎて後に消息す、一首

楨垣にまじりて赤き南天の二えだ三えだ目にしまつりぬ

岸寄りに湖も暮るるか太郎鴨の首さし向けて浮くあはれなり

きこきこと湖沿まがるひとくるま唐辛子積みり赤きその束

雪虫の飛びつつ曇る水の空雪にかもならむけだし幽けさ

## 白須賀

遠州浜名郡白須賀

白須賀は昔の宿、

ただ白し、ものさびで、

その蔀しとみ、はひり戸、

なべてみな同じ障子。

ただわびし、軒のきなみ竝なみの

同じ型、

出て、はひる人すらや、

同じ影。

音も無し、なにひとつ、

埃あづくものもなし。

草屋のみ、

弱き日のあたりたる。

いづこそ遠江灘、

灘見坂ほどちかくて、

薄ら曇る低き空を

風も来ず。

冬ながら、その屯たむろ、

ほのなごむ家がまへ、

ここ過ぎて、きびしくも、

おもほえず、寒しとも、

白須賀は旧街道、

朱の鶏冠とさかふりたてて

軍鶏しやもは居をれども、

そは暮のひとあかりのみ。

とほつあふみ浜名の郡日こほりはぬくし坊瀬越え来てここは白須賀

おなじ冬おなじ薨しとみの日のあたり白須賀はよし古りし白須賀

ここ過ぎてなにか現うつつのけほどさよ物はたく音も立ちて止やみたる



富士五湖

昭和七年、妻子と共に晩秋の富士五湖に遊ぶ。

## 富士五湖

## 山中湖

よく響く冬は暁ふる雨のただにひといろ色の音ぞ立ちたる

うち黄ばむ落葉松見れば狭霧立ち氷雨ひさめひびかふ時いたりけり

山中湖あかつき近し落葉松や目もさむざむと向ふ雨あまぎり霧

針はり縦もみに氷雨ひさめうちひびきいさぎよしことごとの雨よすがしとを見  
む

暁あけの雨冷えとほる玉の野葡萄えびづるのふたいろの玉は瑠璃よ紫

落葉松からまつもしみみ黄葉もみでぬ木きの立たちのまこと直すぐなる緘ほそき葉の神

冬向しふ繁みみ落葉松からまつ氷雨ひさめふりいたもにじめり寒かき落葉松からまつ

河口湖

鶺鴒の島は紅葉しにける岩はなに兎出てゐてぬくとき秋や

鶺鴒の島と舟子かこが呼ぶなる湖うみの島兎跳ねつつ鶺鴒の鳥はゐず

湖うみの島い照る紅葉に遊べるは耳後あとへ垂れて番つがひ野兎

## §

秋の晴湖面こめんにあそぶ紋白蝶もんしろの影ひとつ見つつぽんぽん舟行く

## 西湖

西湖の熔岩壁を立つ鳥の羽ばたきを聴けば間隔正し

み冬づく西湖の鱸すずきよく冷えて釣られたりけり徹とほる気きよき先に

西湖はしづかなる湖うみ瓦焼く煙けむりのぼりゐて秋の色あり

精進湖

パノラマ台にのぼりて

尻高に子が乗る後あとをその母と馬はすすめつよき紅葉なり

ここよりぞ富士は裾野の見わたしと水照みでりしづけき四つの湖見うみゆ

青木し繁む富士の裾原風乱みだり行きはしる雲の絶ゆるまもなし

雪の富士ほに現はるる立ち待つと将た寒けかり繁あまぐもき天雲

帰路湖畔にて

精進湖雲あし赤く日暮なり写真とらすと家族うから馬な竝む

## 本栖湖

もとすこ  
 本栖湖は奇ふる湖、霧ふかく、水皺幽かに、青木立神さ  
 うみ  
 びせず、渚ゆく人かげも見ず、風ふけばひろぐる面の、  
 かげ  
 影日向、黒くあかるく、をりをり映る。

## 同じく

パノラマ台より俯瞰す



もとす  
うみ  
本栖の湖かがよふ見れば水皺立ち霧ながれをり流るとなしに

ゆきき  
本栖の湖雲去来してみ冬なりこちごちに光るしろがねの面

かす  
一色に幽けかるなり時じくをみづうみの面へ吹きおろす雲

つらな  
雲の遠に南アルプスと思ふ雪かがやき列竝み本栖湖暗し

うみ  
こも  
み冬の雲もこごるか我が湖と木立神さび黒く隠らふ



初夏北越行

昭和四年六月、新潟、今町、国上、出雲崎各地に遊ぶ。  
吟懐三十四首。

## 初夏北越行

## 新潟

夏すでに砂丘の光おぎろなし弘法麦の筆の穂のいろ

砂山の茱萸ぐみの藪原夏まけて花了りけり真砂積まざいむ花

海荒く砂丘のい照り涯はてし無し燈台が見ゆ赤き燈台

港には装よそひましろき船いくつ夏はさやかに雲流れ見ゆ

松原、日光療院裏にて

数珠茅じゆずがやに夕づく日ざし柔やはらなり穂のまだ伸びぬ青き数珠茅

北越沿線

挙こぞり出づるこの国原の田植どき植うるかぎりが田にとよみつつ

挙こぞり出でて苗ひき植うる田植笠早やおもしろしうなかぶしつつ

日おもてのたも木に霧きらふ夏がすみ植うる田も見ゆ早苗田も見ゆ  
山里は家の南の田並びを皆出て居らし植ゑそめにけり

今町郊外

弥彦いやひこの夏山霞ただならず国上くがみは末にうち低みつつ

おほかたは田を植ゑ並なめぬ道の手にたもの若葉の照り交かふ見れば

赤々とこくれんぐわしの毛は垂れて田へ行く子らに朝そよぐなり

註、こくれんぐわしは唐もろこしの方言。

国上行

草繁き山いくつある小峽をかひとて蛙のこゑのよくひびきつつ

乙宮のおもての田居に鳴く蛙日光ひかげしづけき山片附けば

かへるでのさ青をの明りにうつら来る植女うゑめがひとりまろき菅笠



山<sup>やま</sup>方<sup>かた</sup>は国<sup>く</sup>上<sup>がみ</sup>へかかる道の端<sup>は</sup>にぬきて竝<sup>な</sup>べぬ涼<sup>わ</sup>し早<sup>さ</sup>稲<sup>いな</sup>苗<sup>なへ</sup>

植<sup>う</sup>ゑそめて山田の畔<sup>くろ</sup>の昼<sup>ひる</sup>餉<sup>くわ</sup>どき童<sup>わらわ</sup>らとよみ早<sup>さ</sup>やあがり来る

あしびきの山田の田居<sup>ひなみ</sup>に日<sup>ひ</sup>竝<sup>な</sup>り隣<sup>となり</sup>り植<sup>う</sup>ゑたり田<sup>い</sup>竝<sup>な</sup>びの友

あな清<sup>さや</sup>け小田の山田は植<sup>う</sup>ゑなめて目にもみどりの風そよぐなり

ゆきかへり見つつましけむ国つぶり揺りおもしろき田うゑ菅笠

ありやとも求め来て思ふ道の端はに君が置きたる黒き鉢の子

五合庵の蹟にいたる

国上山くみやまのぼりつつ来し杉むらを松風の音おとぞ吹きしづみたる

蔭山の夏の小峽をがひの桐の花咲きにけるかも群杉が木間こま

国上くがみの片山蔭の桐のはな遠く蛙の鳴くがしづけさ

まさしく閑しづけかりけり桐の花の咲きあかる上に松の音して

風そよぐ板屋いたやかへで楓の二三もとこの庵いほりも夏いたりけり

山かげの君がいほりの跡どころ楓かへであかれり 青おをがへる蛙鳴き

早稲田わさだには雨けぶるらし真木山のこの見おろしも蛙鳴きつつ

出雲崎良寛堂

出雲崎は良寛堂の夕つかた網かいひろげ人かがみ居をる

出雲崎夕浪明し我がひとり君がみ堂に詣でるにけり

一色ひといろとうしろに蒼き夏の潮角の御堂はいつくしくして

この御堂夕かげながら詣で来て廂のつまの反りのすずしさ

この御堂夕照りあかしおだ穩しくはしづけさのかぎりたもちたらなむ

出雲崎この夕風のはるかには日かげ現しうつき佐渡ヶ嶋見ゆ

木曾長良行

昭和二年八月、一子隆太郎を連れて木曾川、恵那峡、  
養老、長良川等に遊ぶ。

## 木曾長良行

## 犬山、白帝城

ちかぢかど城の狭間さまより見おろしてこずゑの合歡ねむのちりがたの花

閑しづかなる城とおもふをあはれなり日ではげしく合歡ねむぞほめける

入母屋いりもやの藁わらににほふ合歡のはな犬山の城は白く久しき

## 鷹

蹴爪に岩角をつかむ鷹一羽その下つ瀬ぞ青に渦巻く

岩角に鷹齧くある夕焼がいつまでも見えてこの水早し

犬山より木曾川を下りて

合歡の花移ろふ見れば夏川や河原のい照り時過ぎにけり

花火過ぎ水にただよふ椀殻は鳩の鳥よりなほあはれなり



水車船ふね瀬々にもやひて搗く杵のしろくかそけき夏もいぬめり

笠松の四季の里にて

ふたいろの花さるすべりおほよそに月夜はしろしあかず遊ばむ

夏の夜は短き藤の実の莢さやのはつかに明けて風いでむとす

雀のお宿にて

松が根にそよぐ小萩のあはれさよ蕙しき竝なめ子ら昼寝ひるいせり

惠那峽

こごし巖いは惠那金剛に涌く雲の照りしづかにて久しかりけり

堰せきあまる水量みかさ梢をうちひたし空ちかづきぬ峽かひのふところ

朴ならむ岩石層に吹きあつる風ことごとく光葉てりはかへ翻かへせり

養老 菊水楼にて

もてなしと杉の木群こむらに篝火こむらき溪流の音に添へにたりけり

開あけはなちい寝ぬるみ山の短夜は養老の滝の音しらみつつ

長良

舟べりに羽ばたきあがる鶺鴒の鳥を篝火こむららしておもしろき夜や

腰篋こしに風折かぎをれ烏帽ゑぼし子綱こしさばく鶺鴒こむら匠は夏のものにぞありける

我が物ときさばく檜綱ひづなのはらはらに鶺鴒あさよ匠は鶺鴒をぞ浅夜あつかふ

黒き鶺鴒は嘴黄なりそち向きに水切りて羽うつ火映り見れば

ほうほうと鶺鴒を追ふ声の末消えて月の入るさの惜しき横雲

下卷



童子群像





## 成城学園を思ふ歌

昭和八年四月、東都成城学園大いに紛擾す。その職員、父兄両派に分れ、抗争数月に及ぶ。教育界に於ける未曾有の不祥事なり。当時、隆太郎小学部六年に在り。篁子同じく二年に在り。即ち父兄たる故を以て、我が正しとする信念により行為す。抑この学園たる沢柳政太郎博士総長たり。小原国芳氏その初より主として参劃経営するところなり。同博士死後、新総長小西重

直博士の下に校長小原氏専らその経綸を尽す。この年  
初夏、総長の辞任と共に、つづいて校長を引責せしむ。  
その理由とするところまた故なきにあらざるべきも、  
小原氏に対するその道を失し、遂に教育の本義を誤る。  
我が立ちたる所以なり。録長歌四首短歌八十八首。

雑草に思ふ 序歌

荒地<sup>あれちぎく</sup>菊花咲きほこる道の端<sup>はた</sup>子を思ふ父の濃<sup>はた</sup>き影<sup>た</sup>佇ちぬ

竹煮草粉たけにぐさこにしろくふくこの日でり堪ふべしや我も省かへりみなむとす

相憎む輩ともがらがうへに思ひいたりしみじみとあり日の照る庭に

この原や草深くさぶか百合かゆりの草ぶかに匂ひこもらひ昨きのそはありにし　（沢柳

先生を憶ひて）

成城学園また子ら行かず雑あらくさ草の花咲きほこり早や文月ふづきなり

小原校長送別会

四月某日、荒涼たる校長送別会なるもの開かる。父兄  
その理由を知らず。ただ一部の理事及び財団の刻薄に  
驚く。蓋し直感すること深し。挙り起ち遂に流会す。

ひと鉢の草の花だにすゑなくに昼冷まじく師を儼ふとす

追ひ儼ふ下心はさもあれやいふ言は皆うやうやし聞きのよろしさ

事はてむ憤らくも現なり父母よ見よこは正眼なり

## 母の館

母の館は児童の母たちの建設するものなり。感慨深し。

母の館くわん窓は開けど照る月の来り坐らむ椅子ひとつ無し

## 母の館父兄会

父兄遂に立つ、四月三十日なり。

言<sup>こと</sup>挙<sup>あ</sup>ぐと胸ぞ迫りて泣きにける父と母の声はみな誠なり

空見つつ何の言葉ぞ手ぶりよく説きは巧めど胆<sup>きも</sup>に響かず (長田

博士に)

### 小学部

五月十二日、小学部職員、父兄を招集し、その態度を  
声明す、一に結束固し。

一に成城教育の精神をうち建つるもの小学部なり我疑はず

上衣うはぎぬぎ汗みづくなれやかく歎ことあきしかく言ことあ挙げ君ひたすらに

(内田訓導)

いふ言ことは拙ことけれどもひたおもて眼は輝けり下した心たな哭けるなり

(齋)

田訓導)

我が子

子の太郎声はあげつつ歸りたり我が先生を正しと言ふなり

我が太郎まこと直すぐなりや幼なくもただに師を見る眼はまじろがず

心よりその師よしとし疑はぬこのをさなさに父我泣かゆ

我が立つは

此の立つは私わたくしならず、人ひとり守るとにあらず、皇すめぐに国をただに清むと、正しきにただに反かへすと、心からいきどほる我はや。まさやけき言ことだて立かか彼は、ゆるすべき邪よこしまか其は、己おのが子のためとは言



はじ、すべて世の子らをあはれと、胸張り裂くる。

反歌

この道よただにとほれりこごしくも敢てい行くに何かはばまむ

正しきを

正しきを正しとせずば、照る日さへ子ら疑はむ。まさやけき明<sup>あか</sup>し  
とせずば、かぎりなく澄む月にすら、闇かとも子らはまどはむ、  
安寝<sup>やすい</sup>しなさね。

## 母の館父兄大会

五月十四日、母の館に再び父兄大会を開かむとす。事前三沢校長の命により、その扉に釘うつ。後漸く開会す。小原前校長来り初めて辞職事情を釈明す。

声絶えて道に言はずも父母の子を思ふ誠ただにとほらむ

人の子は棄てて清くば道芝の塵だにも如かず風の埃に

多摩川にさらす調布たづくりさらさらに何ぞさらりと棄てて去りにし

この子らぞ父よ還れかへと祈るなる還り来ませや何も言はずて

この子ら

その後、紛糾、遂に休校令下さる。而も学生は皆登校し、自学自習すること常のごとし。

この子らを見つつ歩あるけば地は灼やけていや日は暑し影がしるしも

この子らがボールかつとばす音さへやま空にひびき痛いたいた々し我は

ほがらかに子らはあるべし畏おそれ無く心揺り遊び常すこやかに

きびしく今は鍛へむ事しあるかかる日にこそ光るべきなれ

女学生自学、自ら出て体操す。

馬鈴薯のうす紫の花ゆゑにわづかに堪へて子らは足踏む

反動の教員たちに

何ぞ、暴動もせざる子弟をば師を脅迫せりと誣ふる。

日のもとに父打つおのが子らありと悲しみてよき空もあるらし

道は説け言は繁くもしかれども生の命に触るる無くば如何に

## 真実を觀よ

事はただに單純なり、学園のこの空を見よ。

雲くもしろくいゆきわたらふ夏の空松まつ蝉ぜみの声ぞここにしづけき

誠あらば神も哭なくべしこの声やしづかにはあれど父の声なり

この子らは共に遊ぶを遊ぶ無しその母と母の何憎みする

六月三日

長き休校の後、この日連袂辞職したる三沢校長初め三十数名の高等及び中学部の職員たち乗り込み来る。前警視總監長岡隆一郎氏校長室にありて何事かを指揮したるものの如し。私服正服の警官四十数名監視、反小原派の帝大教授、その夫人、竝に父兄等活躍す。あはれ学園も末なるかの如く感ぜらる。かくひたぎまに自由教育を善からずとするこの圧迫は如何。

何すとかここにわが来しこの父は子を思ふゆゑに寄るべなく来し

手を面かほに涙もろなるこの爺をぢさ父なるならしとみに老いにけり

(奥田老)

夏ひでり早子を思ふ母の戸に立つと寄り寄りにゐて泣きもあへなくに

子の母ぞ照る日あか明きにかくばかり行きもまどひぬ面おもほそりして

子の母の今のなげきは道芝の照る日に萎なえて地ちしばりの花



## ある日の朝礼

三沢校長脱帽せず、而も国家合唱の半に、中止を命じ、タクトを揮へる指揮者杉先生を壇上より突き飛ばす。

「非国民」の声起る。合唱なほ肅々たり。

国の歌君が代歌ふしづかなるこのひとときは譬ふるものなし

## 三沢校長辞職

よしなき言ことだて立たてやげに退ひくにさへ何かひとこと一言ことは言はねばすま

潔ひき人は退ひくべし棄てざまに吐き棄つる言ことは蓋とほし徹とほらず

三会堂にて

最後の父兄大会なり。

ひたおもて君が直すぐなる言ことあげ挙きぎは聴ききいさぎよし心に徹とほる  
 (加納子爵)

涙共に下るこの声この子らぞ愛かなしとは思もへ亦聴き難し  
 (学生委員)

ある夜の父兄実行委員会

経過深憂に堪へず、奔命に疲る。

我われに無し日はも夜も無し心ぐくただに思ふは子らが額ぬか髪がみ

事しありて君とこそ行け我どちは音清さやさや々し響かひ行かむ  
 (加)

藤武雄氏に)

夜のほども疲れ歸りて力無し山やま方かた早く蟬の啼くもよ

ぬ 夜の田には蛙ころろぐ聴けよ聴けよあはれなるものは声ころろぎ

師を売る者

小原氏遂に告訴さる。その告訴の主は某氏なれど、その策謀の何れにあるかは歴然たり。

日は照るを將た安からし師と頼む市に引き出て早や放りはふ売る

夏早やも棘に花さく霸王さほてん樹の琉球びともすべなかるらし  
 両先生に二首）  
 （某々

国びとは心直すぐなり梧桐あをぎりの青一色に表おもてうら裏も無し

その子らはかくも歎くを石うつと師父ちちなる人を將た縛いましめぬ

## この憤りを、四首

焼き鉄がねよはやるひづめに蹄鉄かねうつと己しが踝くるぶしも火もて焼きそね

眼の白なまき生の鰯すは簀なに竝ひほしめて日乾あまほし串に刺せちふ

鈎かぎ爪つめの脊骨曲りが鈎かぎ形なりに歩ありきはらばひ石の下掘る

陰かげふかき醜しこの土竜もぐらが土つちやぐらたたきうちこぼち日に曝さらすべし

職員某々氏も亦他の職員を訴ふ。

朝なさな机ならべてありけらし今そし譏り合ひて子ら教へをり

告訴せられたる榎本、福上、小野三氏謹慎を命ぜらる。

何頼め降らす石かも草ごもり家居る際きはは香すらえ立てず

風に立つ

心弱き職員たちに

腰弱のへろへろ、正しきを何なづむ。骨無しのとろとろ、立つべきを何呆ほけつる。深山みやまの一木ひとき櫛かしの、風に立つ樹思へや。

## 反歌

男子をのこなれふぐり締めこそひよろ腰のへなへなゐしき臀むしろうつべし

## 照る日に

悪しきは沙汰過ぎたり。悪しきを見過ぐすもの善よからじ。弱きも  
の詮無し。照る日に、この明あかきに、何怖おづる、人びと。五月さつきの、



白雲のいゆきしづけ松むら、その姿思へや。

反歌

清明<sup>さやけ</sup>かるけだし稀<sup>し</sup>なり自<sup>し</sup>がためと草のいきれを汗<sup>あせ</sup>して歩<sup>ある</sup>けり

女学部に対する圧迫いよいよ加はる

清<sup>すず</sup>しかもその新<sup>わかづき</sup>月の眉あげて敢然と立つ少女<sup>すずめ</sup>ら見れば

藤棚の藤の葉とほる日のひかりつくづくと土<sup>つち</sup>に見つつあらむか

少女らははげし日中も舎居らず池のべ求めて秘読みにけり

朝なさな清さやにのぼりし足音の早やたどたどし泣きて行くかに

或る母たちに

賢さかしくもをみななりけり言ふことは早や愛かなしけど己が子をのみ

言立ことたててつぶさにはあれ女子をみなづや背戸の春日に牛売り損ふ

よき母は清くありこそ照る月の子を抱きつつ草に立つかに

口あくるもの

朝夕しきりに文書にて誹謗する者あり、煩堪へがたし。

あなうるさ草につくばふ下闇の蚊喰がへるが咽喉のんどほほづき鬼灯

狐狸

横議の士続出し、新聞利用またしきりなり。

日のまぎれ我は直行く野の道を横さ走りて鼬目翳す

ま日照りを夜の陰草にたぶらかす狐のやかからは犬に噛ましめ

小原国芳氏におくる歌

物言ひて清けかるべし天つ日に事あらはなり隠すよしなし

身ひとつにただに命をこめにける自が学園は他のものかは

夢なりや縦よしやかなしき我が業わざと君樂しみき悔いむ何無し

事すべて私ならず道直ただに公ありて徹とほり行くべし

世に憂ふ人が言ことあげ挙まつぶさに言ふことはよし多く私

悪しとなす言ことの僻ひがごと事しからずば神にありなむを人なりき君も

再び

憂ふ無き君たはやすし事々につくづくと思もへばよく投げにけり

大味も程にこそよれ幾塩と薩摩の鰯ぶりよ塩つよく沁め

君繞めぐる人も実さねなし必ずも言いふらくただに下した心に思はず

時により教へ賜たぶなり世に憎み荒たぶる言ことも聴きて畏こさ

感深し

師、子弟、父兄、これこの学園の三位一体となすもの

なり。

三つの円この触れ合の全またけくもしかもほのぼのとよかりけるもの

昭和七年三月、女学校卒業式直後、小西、小原、銅直、金子諸先生同乗の自動車、電車と衝突し、転覆す。今に於て感深し。

困もとし無き災いはなしこの道や心そろはざれば皆くつがへる

既に遅る

挙り立つなほし遅おくれき何をしかい行きたためらふおその父母

還るなき人を待つよは落鮎や多摩の瀬合あしたに朝釣るべし

諸人よかもかくもなし香かにこもる草深小百合省みななむ

児玉新総長に、一首



静かに觀君はますべし善き悪しき後つのちぶさなりその秋俟ときまたむ

人々よ、真に思へ

草の原に蒼くいたあまたく天つ空げに事も無し大きむなしさ

天地とむなしかるべし身ひとつに何物も無ししかく生きなむ

思ひしみつくづくと人はありけらし朝起きてそよぐ草の葉を見よ

恩讐を越えて

夜ふかく今に思へば善き悪しきすべて遥かなり額<sup>ぬか</sup>垂るる我は

## 童形

## 秋夜童女像

月あかしひと日吹き去りし風速のとどろなりしか今は気けもなし

女めの童わらはあかき石ざくろ榴をを掌てに置きてゐやまひ正し九九をこそよめ

髪いらふ童どう女によが笑顔かぐるくも艶えんだちにけり父をうち見つ

額ぬかがみ髪かみのかなし女童めわらはうつら読みまぶた垂たりをり燈ひをあかく置き

女めの童わらは肩はに頬ほをあてうつら振る垂た髪がみ黒し肩かたにしばしば

ねむからばまこと寝よとしかきおこし燈ひは明あけし女め童わらはを母は

硝子戸ひょうしの燈とう映うつり見ればスエタアぬぐ紅べにの童どう女にょ眠ねむ気げなりけり

秋夕

ひたすらよ　これの女め童わらは、文字書くと　習ふと書きぬ。その鳥

の 鳥によく似ず、その魚の 魚とも見えね、あなあはれ 鳥や  
 魚や、巧まらずも なにか動きぬ、その影象<sup>かげたち</sup>。

### 反歌

このゆふべ空やはらかし物の葉にさだかにはあらぬ狭霧なづさひ

### 制帽

中学生、我が子の太郎、道ゆくと、読むと、坐ると、箸とると、  
 帽かむりゐる。制帽よ制服よただに、金釦しかとはめゐる。うれ

しきか小学卒へし、中学やししかほこらしき。蘇枋咲くと、樗あふちそよ  
ぐと、霜置くとあはれ、一学期二学期よとあはれ、日の照ると、  
雨ふると、風ふくと、寝ぬると起きると、制帽かむる。

## 反歌

はつ霜とけさは霜置く門の田に晩稻おくての黄ばみ見つつ子は居り

風騷四部唱





## 薙露

## 沼津薙露行

若山牧水の七週年に際し、哀傷の新たなる、遂にこの  
追懐吟一聯を成さしむ。

## 一、その庭

水の音常は幽<sup>かす</sup>けき庭ながら人入り乱りたづきあらなくに

まどに見て松が枝<sup>くろ</sup>黝<sup>くろ</sup>き日のさかりしばらくは聴かず蝉の声すら

やり水のちろろとくぐる篠の根も眼には光れど心には観<sup>くわん</sup>ず

二、瓢と仏

うち見には瓢<sup>ひょう</sup>枕<sup>まくら</sup>に仮寝してただにとろほろと人ぞ坐<sup>ま</sup>したる

この仏いまだ酔ひ臥し安らなりおのづからいつか起き出でまきなも

うたた寝ゆ或あるは目ざめてたほたと振らす瓢か酒をこほしみ

三、その人

胸を張りて朗らなりける歌ごゑの君なりしかも塵もとどめず

よく遊び常に愛めでにし山水とさやけかりしかとどこほる無く

四、火葬場へ

狩野の川瀬にすむ鮎の若鮎の今かさ走りにほふその子ら

靈柩車火にほろびたる街ぬけてひたに香貫の道駛りはしつつ

かきおろすひつぎ柩にうごく日のひかり夾竹桃は今ぞくれなる

五、伊豆大仁穂積忠宅に宿る、義弟山本鼎と伴なり

油もてすべなゑがくか芋の葉を露のまろびて落つるその玉

すべはなし風にかがやく芋の葉をゑがく油絵われは観てをり

六、三津の浜にて

群れつつを生いけす簀すの鰯しこ子の片寄りにそろひさ走りめぐりやまぬかも

船にして網くりたたむ子らがこゑ夕焼の頃はとみに勢はやりぬ

三津みとの浜ゆふさりつかた出でありくと絵を描かく友の傍そばに寄りゆく

茅ヶ崎南湖院

昭和九年四月十八日、大手拓次君病歿、妻と行きて告別す。

南湖院潮騒しほざゐひくし春もややふ闌けにつつありて人は果てたり

臨終いまはまで我をたのめと沙汰せよと待ちまけし君をひとり死なしぬ

死顔の神さぶ見れば灯ひをつけて揺るるコードの影か隈だつ

## 電気火葬

春。  
　　仏は義妹富子の母刀自、落合火葬場にて。昭和九年晩

## 1

継ぎおこる電気火葬の火のとどろ聴きつつすべな舍利ひろひ分く

この仏えにし深からずつつましく舍利は挟みて春雨間あままなり

この骨片こつぺん息づく見れば下紅あかく仏はいまだ燃えていませり

目にとめてうち白しらみゆく骨こつの火氣ほけ箸につきあはせ拾ひつつあはれ

さらさらと骨粉をあけ夕さむしおんぼう隠亡はよにも手馴れたりけり

## 2

迎ひ立つ軍帽ひとつまぶかなり何か立ち待つその焼がまを



火に葬<sup>はふ</sup>る今を盛<sup>さか</sup>りの音聴けばおほかたは早やもほろびたるらし

電気火葬の重油の炎音立てて猛<sup>たけ</sup>るたちまちを事は果てたり

## 3

手を洗ひつくづくと見る向う雨山の桜しろく咲きたる

## 若き誰彼

しみじみと堪へてゐれども身のほとり数死にけり若きともがら

か  
が  
な  
べ  
て  
あ  
は  
れ  
よ  
と  
思  
ふ  
春  
か  
け  
て  
幾<sup>いく</sup>人<sup>たり</sup>  
か  
死  
に  
し  
我  
が  
眼  
さ  
ら  
ず  
も

若<sup>わか</sup>人<sup>うど</sup>  
は  
身  
を  
い  
た  
は  
ら  
ず  
ほ  
と  
ほ  
と  
に  
疲  
れ  
つ  
つ  
来  
し  
つ  
ひ  
に  
死  
に  
せ  
り

## 風懷

## 冬夜醉歌

昭和七年の冬のことなり。深夜、池上町なる斎藤瀏将軍を驚かし、遂に暁にいたる。

ことさら我名<sup>な</sup>告<sup>の</sup>らずも夜のふけてとどと叩くは酒の神と知れ

この夜寒とどと襲へば戸はあけて眼をこすりをらす我なり將軍

夜風の旋風つむじなし入るおぞや我酒出させ早やとうちころびぬる

冬の夜もとよもす酒の友どちはおろかしくしてかなしなかなか

蠅をどりなるものを仕りて

冬向ふ蠅の日向の舌ねぶりあはれ手ぶりにまね申すなり

## 五十九議會

五十九議會大に紛擾し、  
窓硝子を破り、遂に流血の醜  
状を曝らす。

一茎の草の葉にすらひざまづく心は思へ彼等知るなし

朝雲の大き御氣色みけしきかすかだに仰ぎまつらばただに涙ならむ

今朝やぶる硝子のひびき寒きびし畏き方にきこえずあらなむ

血を流し汝等あるべし音のみかその頭割りよき醜の鉢金

陣笠と電燈の笠と何そちがふ凍みつくはただに冬の蠅のみ

歌人の或る向に

言さへぐ何の楽しみ争ひて声音高きが多く怖ぢつつ

闇怖づる弱き奴が空声を毛の荒ものの如くふるまふ

## よそ事ながら

女弟子もつものにあらずしみじみとかく思ふゆゑに身を退くひ我は

師をうやまひ弟子をかなしむ さもあらばあれほか 遮 莫 外ほかならぬかもよ男女なんによてふ

もの

## 短歌朗吟

ほのぼのと歌ひあげゆく声きけば暢のびうらがなしうつくしき揺り

現うつしくも恍ほれたる春のゆふなげきおのれ揺りあぐる声の羨ともしさ

よく歌ふ春もあらねば我やはた歎なげきわぶなり声の揺り聴き

歌ふとし声に巧まば流るべし物のかなしき心知りてな

うちあげて朗らなりける我が友の牧水のこゑの今もおもほゆ

歌ふこゑ澄みぬる際きはよすべからく梁うつばりに塵もとどめざるべし



## 春宵

## 春宵東金囃子

中なかぞら空に紫あかる月夜雲九十九里の浜の春のしづかさ

月や春、北きたのかうや之幸谷の村むらかた方を舞ふ獅子舞の笛もこそ行け

ひたしやぎり月に吹く子が横笛は口もて吹かず腰ゆすり吹く

口あけてくわんと鳴らした頭のひねり獅子はおもしろ家に躍り入  
る

東<sup>とう</sup>金<sup>がね</sup>の茂右衛門どのといふ謡<sup>うた</sup>は春の朧のものなりけらし

月夜暮春調

水ぐるま春の月夜の野<sup>の</sup>平<sup>だひら</sup>に音立ててをり遠かすむ森

夏向ふこの夜すがらに月は照り水車しづかや米を搗く音

月夜立つる水車の音は夜ごもりとかすむ草田の低みより立つ

嶋田旭彦病篤しといふ

音ひびく春のおぼろを人すでに意識すら無しと月の曇りを

月おぼろ草田の堤歩み来て今は聴きをり臺を蛙を

夏すでに月の堰みぜきの遠をちこち近に蛙啼きつつ水幅みはば明るむ

マチす擦りて子らとうかがふ砂利道に杉菜のみなる露のこまかさ

風そよぐ蓬のうれ葉裏見せてしろき月夜を田へ下りるなり

## KONZERT

## 或る夜の音楽会

大きチエ口立ち擁かかへつつ夜は明あかし押しあてて弓きゆうのいまだしづけさ  
立ちかかへ脊丈をあまるチエ口の棹しんじん新人はかなし指にそだたく

四人<sup>よたり</sup>立ち揺り弾くチエ口の四つの胴張り厚うして響き合ひにけり

立ちかまへ擁<sup>かか</sup>ふるチエ口は黄褐の女体なり弓<sup>きゆう</sup>のかいなづる胸

チエ口の胸ひたかきむしり<sup>たひら</sup>平なり揺り曳きにけり<sup>ひ</sup>灯に光る<sup>きゆう</sup>弓

チヤイコフスキー交響曲第六口短調「悲愴」なり香蘭のことをい  
つか思<sup>も</sup>ひるき

永日

永日

臺たうに立ち葉牡丹の花のどかなりうつら飛びめぐる虻と蜂と蝶

葉牡丹は臺立ちほけて日が永し花さきにけりちらら黄の花

康徳皇帝を迎へ奉る

国を挙げて声はとよめどしづかなり神と聖ひじりのみ手とらす時

日のもとに我が大君とみそなはし春のあしたの山ざくら花

### 軍刀の歌

陸軍の依嘱により大陸軍の歌成る。恰も日露役三十年  
記念に際し、昭和十年三月十四日附、軍刀の贈を受く、  
靖光の新刀なり。その歌に曰く、

大陸軍の歌

1

青雲あをぐもの上に古く、

仰げ皇祖、

天皇の大陸軍、

道あり、統べていっ一なり、

建国の理想ここに、

万世、



堂々の歩武を進む、

精銳、我等、

我等奮へり。

## 2

盤ばんじやく石ちかひと誓堅く、

守れ軍紀、

天皇の大陸軍、

勅ちよくあり、律は儼たり、

奉公の誠常に、

一心、

烈々の士気は徹る、  
とほ

身命などか、

などか惜まむ。

3

旭きよくじつ 日ののぼることく、

揚げよ国威、

天皇の大陸軍、

風あり、軍旗燦たり、

大陸の血河すでに、

征戦、

赫々の誉高し、

忠勇曾つて、

曾つて範あり。

## 4

六りくがふ合を家と広く、

布しけよ平和、

天皇の大陸軍、

道あり、東亜我あり、

国防の一線ここに、

満蒙、

生せいせい生の秋ときぞいたる、

決然、敢て、

敢て当らむ。

大君おほきみの大御軍おほみいくさの行くごとく日はさしのぼり茜旗雲

この賜たまぶは陣太刀づくり靖光やすみつの鍛へに鍛へ魂こめし太刀

我が歌をよしと嘉よみしてたまひたる陸軍大将の太刀ぞこの太刀

白絹しらぎぬの袋紐とき柄つかがしらさしいづる見れば黄金づくりの太刀

この太刀の柄つかの猿手ざるでに結ゆひ垂らしあなゆゆしかも朱あけの緒ゆの揺り

柄つか鞆ぎやの黄金みの桜あか三つ明り大将刀ぞ褐かちの糸巻

心澄みて抜き放つ太刀春浅し眼は※きつさきにそそぎみにけり

よく反そりてにほふ焼刃きさきのこの気先新刀は清し冴えに冴えたり

丈夫ますらをやなにか歎かむ 皇国すめぐにの軍いくさならずも歌をもて我は

大将刀父のみ前にとり捧げ言ふことはなし今日はをさなき

隆太郎に

此の太刀は皇国すめぐにの太刀胆きもむすびうちのうちし太刀ぞ心して守もれ

神ながら清く明らけきひた心りゆうりゆうと振る太刀に子ら見よ

あさみどり満天星どうだんの芽の日に映えて新刀はよしひと一ふりふた二ふり

うち粉叩き叩きつつきよ此の太刀の清の明りぞ花と照り合ふ

或る人に

大将刀抜き放ちまも瞻る我が笑顔写真ニユースに見しといふかや

洩れ承りて

日の真昼我が大君はきこしめし今いさぎよし大陸軍の歌





## 卷末記

昭和十四年十一月十三日、寒波しきりに到つて、私の眼底は痛む。立冬既に過ぎて、この私の薄明の視野には、やうやうに我が頼む光と影とが消えつつある。私は今、口述しつつ、この卷末記を妻に書き綴らせてゐる。

心貧しくしてかの春の日の夢殿を思ひ、その高貴と知性とに本来の郷愁を感ずるこの私は、抑々何であらうか。

童女の朱衣がいまだにこの網膜に映像するのに、私の短日は微かに邃い。

曾つての夏、雲海の上に出でて、飛翔し飛翔した私は、かへつて郷土のまことに触れた。

あながち歌に遊ぶとはいはない。かの夢殿の霞にやんごとなき籠りを籠りとせられた終日ひねもすの春を慕ふものである。少くとも私の道に於て私は楽しんでゐる。

齡知命を踰えて、いつまで稚い私であらうか。

『夢殿』は、前集『白南風』の姉妹歌集である。即ち『白南風』が、大正十五年暮春、小田原より東京谷中天王寺墓畔に転住して以来、馬込緑ヶ丘、世田ヶ谷若林、砧村大蔵、等に亘る東京生活の所産であるに對し、本集は、殆同時代の羈旅の旅を主として採録した。尚、羈旅以外の人事生活篇「童子群像」「風騷四部唱」等は彼の集の「砧村雜唱」の続篇たるべきもの故是に附加した。姉妹集たる所以はここにあるのであるが、ただ年代に於てその直後、雑誌『多磨』の創刊に到る迄の、略一年間の延長がある。

尤も羈旅歌としてはなほ『白南風』と『多磨』の期間に「白良」以外「伊豆の初夏」、「音・光・風」、「雪冠」、「溪流唱」、「水戸唱」、「河童早春賦」等の創作があつたが、これらは編輯

の都合上次の集に譲ることにした。

さてこの『夢殿』は主たる羈旅歌を上巻とし、副たる人事生活篇を下巻とした。

本集の内容は左の如くである。

白良

長歌 一

短歌 一七

富士五湖

長歌 一

短歌 二四

郷土飛翔吟

一七

二五三

初夏北越行

三四

郷土と雲海

四

九五

木曾長良行

二一

羈旅小品

一

四八

童子群像

六

九七

滿蒙風物唱

二一一

風騷四部唱

九〇

夢殿

四二

卷末に

一

浜名の鴨

四九

計 長歌

三〇

短歌

九八二

總計

一〇一二

『白南風』に於て、その生活年代と、製作年月が必しも同一でない如く、本集に於てもそれらの相違がある。而もいづれも生活に準じて、編纂せられた。つまり『白南風』時代である。従つて本

集は昭和二年八月より昭和十年三月に到る期間の羈旅及び身边生活に資材を得たものであるが、その製作は昭和二年より同十四年七月に到つてゐる。

また『白南風』がその編纂に志して以来新に感興の昂騰に乗じて殆その半に達する補作を得たるが如く、本集も亦「郷土飛翔吟」、「郷土と雲海」、「満蒙風物唱」等の大連作を初めとして、「羈旅小品」「夢殿」「木會長良行」の諸篇に亘り、凡そ六百余首の新作を追加するに到つた。この最近六月より七月上旬へかけての日夜行に因るものである。その他旧作に於ても、削除すべきは割愛し、抄録の分も更に改訂を敢てした。又新作の分もその後

の推敲に於て聊か面目を改めたかと思ふ。

茲に煩を避けて一一に是等に就き解説をしないが、白秋年纂『全貌』その他今後の私抄について彼我对照して戴ければ幸甚である。

前述の如く、この『夢殿』は『白南風』の姉妹歌集である。これらは楯の両面の如きものであつて、いづれもが私のものであり、同時代のものである。かの『白南風』を通じて私の歌風に変化がないことを速断した向きは、この『夢殿』と綜合して改めて見直して欲しいと思ふ。歌風に変化がなかつたのでは無く『白南風』の編纂の法が、かくあらしめたのである。

『白南風』と『夢殿』、一は静であり一は動である。或は觀照に、或は叙情に、その時々、に於て私は常に自由に自らの変化を變化としてゐる。

ただ本集を読んでくださる方に願ふことは、これらの一首一首につきぢかに触れて専らに味つてほしいのである。而してまた一首を中にした四方の空間をも楽しんで欲しいことである。また作者の丹精そのものを讀者その人のものとして、その鑑賞にその時を割いて欲しいのである。

本集の編纂がその年代に五年も遅れたことは、雑誌『多磨』の創刊と共にひたすらに前進を続け、過去を顧る余裕も無かつたのであつた。既にその後作歌も千三百首に上つてゐる。これらは眼



疾の前後に別つて、いづれ二冊として順次に刊行する予定である。

編纂方法に就ては、上巻の羈旅歌は略倒叙の形態をとり、下巻に於てはその内容について分類し、その篇毎に年月の順を概ね正しくした。

全体を通じて最も旧き作は、「木會長良行」の犬山城や、水車船、四季の里等の景情であり、最も新らしきものは、「飛翔吟」の雲海の一連である。歌風について云へば、眼疾以後の今日のものも多くが前時代のものと同交錯してゐる。

終りにこの歌集『夢殿』は、往年の『雀の卵』編纂の当時私と苦楽を共にした鎌田敬止君が、この度八雲書林を創立するに当り、

その需めに悦んで応じた。そしてまた大に柔らかに悩まされたが、それにしても私の度を超えた推敲の習癖はまた其人に煩瑣と困惑とを与へたに違ひ無かつた。

巻頭の朱衣の童女像は、永瀬義郎君の筆であつて私の永く愛蔵するものである。その童女の面貌が私の篋子に似通つてゐる節もあり、その篋子をまた人人が呼んで夢殿となしたことから、この歌集はこのやうなものとなつた。

狭霧立つ櫛はじの木群こむらの深みどり我が水みな上かみはわけて哀かなしき





# 青空文庫情報

底本：「白秋全集 10」岩波書店

1986（昭和61）年4月7日発行

底本の親本：「夢殿」八雲書林

1939（昭和14）年11月28日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※小見出しよりもさらに低位の見出しには、注記しませんでした。

入力：岡村和彦

校正：光森裕樹

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夢殿

北原白秋

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>